

インタビュー

塚田 理氏に聞く

聞き手 鈴木勇一郎  
山中一弘

塚田 理氏略歴

- ◆一九二九年 新潟県高田市（現上越市）生まれ。
- ◆一九四七年 立教大学予科入学。
- ◆一九五二年 立教大学文学部英米文学科卒業。
- ◆一九五七年 聖公会神学院卒業。
- ◆一九五九年 英国オックスフォード大学大学院入学。
- ◆一九六二年 同大学院からDoctor of Philosophyを授与される。
- ◆一九六二年 聖オーガスティン・カレッジ入学。翌年 Diplomaを授与される。
- ◆一九六七～六八年 エキュメニカル・インスティテュート（スイス）で研究。ジュネーヴ大学大学院より Diplomaを授与される。
- ◆一九五七～五八年 日本聖公会名古屋学生センター主事。
- ◆一九五八年 聖公会神学院助手。その後、助教授を経て六五年、教授。
- ◆一九六八年 立教大学文学部助教授。七二年、教授。
- ◆一九七五～七九年 立教大学文学部長。
- ◆一九八二～八五年 立教大学総長室長。
- ◆一九九〇～九四年 立教大学文学部長。
- ◆一九九四～九八年 立教大学総長。
- ◆一九九五～二〇〇〇年 立教学院院长。
- ◆『象徴天皇とキリスト教』『主教制とは何か』『日本聖公会の形成と今井寿道』『教会の革新』他著書・論文多数。

## 第一回インタビュー

——まず、趣旨を説明させていただきます。現在、立教学院一五〇年史編纂を始めていて古い卒業生の方や教職員の方々の、特にキーパーソンになる方に順次お話を伺っています。とりわけ院長、総長をされた方では、実は塚田先生が現在、最長老であるということ。それから、総長だけではなく院長もされている。院長と総長を兼ねられたのは松下院長・総長以来のことですから、そういう意味でも重要だと考えています。当然、卒業生でいらつしゃいますし、戦争直後のことなどを聞ける方も非常に少なくなっています。

さらに、聖公会神学院との関係、キリスト教学科、キリスト教育のことなどを、長い通史的事にお話を伺える方は本当にまれになっている。さらに、院長・総長時代のことになりますが、一貫連携教育あたりについても、これはすでに九〇年代の話ですが、聞ける方が少なくなっています。ですから、聞きたいことがたくさんありますが、本日はとりあえず中学校をご卒業になって立教大学予科に入られる。立教大学でどういう学生生活を送られてきたかを中心に、短く伺いたいと思っています。

## 立教大学の学生時代

塚田 私は昭和二二年に立教の予科に入りましたが、本当は医者になりたくて医学部を志願していました。それで芝のほうにある慈恵医大を受けて学科も身体検査もいちおうパスしたんだけど、合格通知がちつとも来ない。それでやむなくすべり止めでもある立教を受けたわけね。立教に入ってからもう一回、慈恵に行つたんです。そうしたら、お待ちくださいというわけだ。その時は旧制の専門学校があつて、その旧制の専門学校の学生が新制の医学部の予科か何かになる。そこで外からの応募者と、上からというか、すでにいる人との間で調整しているというような話だったんだけど、全然なくて、それで私の知っている慈恵医大のお医者さんに「こうなんだけど、どうしようか」と言ったら、寄付が必要じゃないですかって（笑）。私は両親が病気で、そんな寄付なんていう話ではないからあきらめて、そのまま……。

あと、立教にはそのころ医学部をつくるという話があった。だから、私が四年生になるぐらいのころには……。

——できているだろう（笑）。

塚田 医学部になるんじゃないか。それも期待して立教に入つたんです。そういう意味では立教大学には申し訳

ないんですが。私は牧師の息子だったから、あのころ授業料は免除してくれると。それで両親が病気であったけれど何とかなるというので、奨学金だけもらって、ここにきて。ですから、ちょっと斜めで立教大学に入ってきたみたいな変なことで、申し訳なかった。

ところが入って見たら、私はあのころ学校からの指名でクラス委員になったんです。

——それは予科の時ですか。

塚田 予科の時です。クラス委員と副委員というのがあって、私はクラス委員。田舎から出てきて、いきなりクラス委員なんて言われて困ってしまったんです。立教中学から来た連中もいて、我が物顔で動き回っていたから。でも、その時にちょうど全学大会みたいなものがあって、クラス委員会が、先生たちの戦争中の戦争協力のような発言をした人たちをつるし上げて、最終的には退職を迫るような運動に入っていたんです。私はクラス委員だからサボるのも何で、責任があるから出ていたんですが。

立教に来てからそんな事件ですっかり驚いてしまったんですが、それに巻き込まれていきました。それから、教授の弾劾大会が開かれました。

私が二年生ぐらいのころ、共産主義とか共産党が大きい勢力を伸ばして広がってきました。自分はクリスチャ

ンではあるけれど、マルクス主義のことを少し勉強したほうがいいんじゃないかと思ってマルクス主義研究会に入ったんです。

——それは予科の時代ですか。

塚田 そうそう。あそこのバラックの校舎の一部に、あの辺に部室があって、簡単な資本論を紹介したテキストがあって、毎週勉強しました。多少共感も入っていたんですが。そのころ宮城前広場で社会党と共産党と一緒にあって政府を糾弾する大会が開かれていましたが、それにグループみんなで行くと言うんです。僕はグループで行くのはやめたけれど、こっそり一人で行ったんです。どういうことになるのかと思って。

——どうしてグループで行くのはやめて、お一人で行くことにしたんですか。

塚田 このグループに入っていると、マルクス主義者というか、共産党のシンパのように見られるじゃないですか。僕はそこまではコミットしていなかったから。だけど、その集まりがどういいうものか見ておきたい。そのころは何でも見ておきたい時代でね、それで宮城前広場に行ったんです。その時は間もなく警官が入ってきて、みんな逃げ回って、私も結局捕まらずに逃げてきたんです。あのころの私はそういうふうな、ややアカがかった学生でした。

その後、私はそのグループに入ってマルクス主義研究会で一年間勉強したかな。でも、それからそっちはやめてしまったんです。そのころ非常に評判になっていた赤岩栄という牧師がいてね。キリスト教の、プロテスタントの牧師なんだけど、マルクス主義とキリスト教は矛盾しないというか、自分はクリスチャンであるが、マルクス主義者であるというようなことで、いろいろと世間を騒がせていたんです。

それで我々は、どのグループですかね、クリスチャンのグループだと思うけれど、彼を招待して講演会を開いたんです。そのうちに話を聞いていて、私はだんだん疑問を持つようになったんです。信仰はキリスト教、社会問題はマルクス主義というふうに分けて、全く切り離したような形で矛盾しないというような言い方では、自分の生き方としてはどうも納得できない。その赤岩さんの話を聞いて、僕はマルクス主義に傾倒するという形でかわかることは自分の道ではないと思うようになりまして。これは私にとって、立教に來ての生活としてはかなり大きな問題でした。

そのころアンデレ同胞会というのが盛んで、私はクリスチャンでしたから、アンデレ同胞会の第三チャプターというのに入ったんです。

——BSAの第三支部ですね。

塚田 そうです。

——当時、立教の学生さんのかなり多くの割合がBSAに所属しておられましたよね。

塚田 そうです、たくさんいました。チャプターが一〇ぐらいあったから。各チャプターにはカウンセラーということで、クリスチャンの先生とかチャプレンがなつて。私たちのグループは誰だったかは忘れましたが。しかし、我々のチャプターはキリスト教の勉強とかそういうことじゃなくて、いろいろな奉仕活動にもつぱら力を割いていました。その一環としてそのころ私は初めて清里の……。

——キープ協会。

塚田 うん、キープ協会。あそこの道の修復作業か何かを、労働に一週間ぐらい行っていました。あのころは道路にも大きな石がごろごろあつて、車なんか走れないぐらいガタガタでした。そこをもう少し整備するということで行ってきました。そんなことで私の活動はアンデレ同胞会にだんだん入っていきまして、学部に入ってもその運動を続けていました。

アンデレ同胞会の会長は小川徳治さん。副会長が伊達さんでしたか、そうだったと思います。伊達宗浩さん、後に総務部長をした人です。私はアンデレ同胞会で自分から機関誌を出そうと言って、井上君という一級下の学

生と二人で『アンデレクロス』という名称の機関誌というか、雑誌を、月に一回ぐらいの会報みたいなものを出していました。その会報の中で、私はアンデレ同胞会の集まりに行っていて、どうも解せないと書いたわけです。なぜかという、学生たちの集まりと思っていたけれど、同胞会の会長が小川徳治さんという教授で、書記が伊達さんとか、何かとにかく役員が教職員で占められていて、学生のほうは、チャプターとしては学生が中心だけど、全体の集まりはどうも学生運動じゃない。

そのころ、私は学生運動としてのキリスト教活動というものを考えていたんです。これはカナダ聖公会の宣教師でパウルス先生という、後に立教でも教えて、後に聖公会神学院の教授になった方ですが、このセロ・パウルスの影響もあってキリスト教学生運動というものに非常に関心を持っていました、そういう運動にしていくなきゃいけない。もしアンデレ同胞会が学生運動だとすれば、やはり学生が会長になり、学生がこれを運営していくのが本筋ではないか。アンデレ同胞会の観点から言えば、誰がなろうといいわけです。要するに、祈禱と奉仕というモットーを掲げて集まっていたグループです。ただ、学生運動としては、私はどうも納得できなかった。それで『アンデレクロス』にそういうことを何度か書き始めたんです。

それで目をつけられてね。途中から新制に変わって、学部へ編入したころ、二、三年生ぐらいの時に学生大会があったんです。私はその前に、学生運動にすべきだという論説みたいなものを先ほどの『アンデレクロス』に載せていた。同胞会の年會が開かれた時に小川徳治さんが演説して「この中にアカがいる」というようなことを言ってる（笑）。そういう人たちは警戒しなければいけないと。記憶していませんが、趣旨ははっきりしていて、とにかくアカがいると。会合を終わったらほかの学生たちがみんな「おまえのことだ」って。塚田は退学させられるんじゃないかって。彼（小川教授）は学生部長として大変に張り切っていたわけですから、みんなそう言っていました。私は退学なんて言われても、そんなことはありえないだろう、あってもしょうがないと思っていました。

でも、結局は学生運動にはとてもできなかったわけです。ほかの学生たちは、学生の自治運動としてのアンデレ同胞会ということには、それほど大きな興味を示さなかったんです。それで私は、活動にはもちろん参加していましたが、これじゃあんまりおもしろくない。四年生のころは勉強のほうはそっちのけだね。あのころはちょうど全面講和か、片面講和かという講和問題が起きていたので、それで平和問題研究会というのを勝手に始めた

わけです。看板を出して、メリット先生かな、彼の一室を借りて、そこで集まるということにしたんですけど、来た人は二三人で、なかなか発展しませんでした。そんなふうで勉強よりはそっちのほうに目を向けていたと言えは、そうですね。

だから、小川徳治さんにはずっと目をつけられていたようです。予科のころはバラック校舎で、廊下がなく、教室の前と後ろにドアがあつて、外から自由に入れる。我々が教室で試験を受けている時、小川徳治さんはラバー底のシューズを履いて、後ろのドアからこっそり入ってきて、カンニングしているのを見つけて、あげていました。試験のたびに何人かそういうのがいましたので、小川徳さん、徳さんと言っていましたから、小さな声で「徳さん、来たぞ」とか何とか言っていました。あのころの思い出としてはそんなこともあります。

私がそういうことをしていたものだから、三年生、四年生のころは、学生部長の小川さんだけではなく、副部長の野口定男先生、文学部の先生が「塚田君、どうしている」ってときどき声をかけてくるんです。僕らはあのころよく、時計塔の中庭が芝生だったので、あそこでみんなゴロゴロして、昼休みなどひなたぼっこをしてのんきに過ごしていました。仲間と一緒に何か話したりしていると、そんなところに野口先生がやってきて「塚田

君、元気かな」とか何とか声をかけられまして、いつも目をかけられているという感じはしました。彼は比較的好意的で私に注意するということはないけれど、たぶん徳さんに言われていたんでしよう、私の顔が見えるところちょっと声をかけていました。そんなことで、私は勉強のほうはあまりしなかったんです。

私は将来何をやるにしても英語が必要かなと、英米文学科に入っていました。別に英文学が好きで入ったわけではないけれど、英文科に入ったんです。でも、いろいろ読んでいくうちに興味も持つようになってきました。私のクラスで副クラス委員をしていたのが、予科の時に一緒だった江河徹。

――後に英文科の先生になられた方。

塚田 そうそう、後で教授になったでしょう。彼が同じクラスだったので、それで彼とも親しくなりました。学生仲間では彼もあのころ信者になったんです。あのころはクラスの中でアンデレ同胞会というか、クリスチャンの学生が多かったから、五、六人は大抵いたから、芝生でごろごろしていると、集まってよく遊んだりしゃべったりしていました。そんなことがあのころのいちばんの思い出です。

勉強のほうは、先生についてというか、勉強したという思いがあんまりないんです。ただ、四年生になった時

ですか、アメリカ帰りの、派手なジャケットを着た、細入藤太郎先生の授業を私はとったんです。彼の授業は授業そのものよりも毎週毎週レポートを出させられるんです。これはアメリカ式で、次は何ページから何ページまでと、一週間に二〇〜三〇ページぐらいのところを指示して、そこまで読んでこいつて。読んでくると試験なんです。だから授業というより、もっぱら試験でした。

試験も、自分が来る時もあるけれど、たいていは助手。私よりも少し上の、何て言ったかな、あのころの名簿を見れば思い出すんですが、その人が助手をしていて、助手が試験の監督と答案を集めるという役でした。ですから、毎週二〇〜三〇ページ読む。いま考えれば大したことはないんだけど、あのころはそんなふうに絞られることはなかったからね。二〇〜三〇ページ読んできて、どんなことが書いてあったかとか内容についての試験だから、読まなければ書けない。あのころは翻訳もあり出ていなかったし、確かに勉強にはなりました。だから授業そのものより、そんなふうに絞られたということが私にとっては後に役に立ちました。

——テーマは何だったんですか、文学だったんですか。

塚田 文学、小説類。

——講義はなしに、いきなり読んでこいと言われて、次の時間にテストをする。

塚田 その時にまた次のページを指示されて。だから講義なんてほとんどなかったんです。

——しかも、今のお話だと本人が現れることもあんまりないというふうな感じだったんですか。それはすごいですね（笑）。

塚田 そうなんです。だから授業というより、テストを受けるため。そして、その内容についてとか、その説明もほとんどないんだよね。だから、ちゃんと読んだかどうかもわからない。後で答案を返してくる。あれはよかったのか悪かったのか。自分なりに勉強に努めたつもりだけど、よくわからなかったな。最終的な評価はもらいましたが、そのたびごとの評価とか、そういうものはほとんどなかった。

——添削みたいなことはしてくるんですか。

塚田 ない。

——何にもないんですか（笑）。

塚田 アメリカ式の絞り方なんだ。これじゃ、本当のことを言って、教えたことにはならないな（笑）。

——そうですね。勉強する習慣だけはつけさせるということでしょうか。

塚田 そういうことです。でも、細入先生はシャキシャキのアメリカ帰りの教授だよ。生きがよかったから、それについていきました。恥ずかしいけれど、ほかには



興味とか記憶に残っている授業ってあんまりないんです。自分はおっぱい課外活動のほうに集中していて、学校の勉強のほうは適当にやっていたわけです。今のところ思い出すのはそういうことですけど、何か質問があれば。

### クリスチャンとしての戦争体験

——先生の課外活動というか、クリスト教に根ざした学生運動とか平和運動に傾倒されたというのは、やはり戦争の経験が大きかったんでしょうか。

塚田 もちろん戦争に対して。私は子どもの時からクリスチャンだから。小学校、中学校は戦争中ですよ。小学校一、二年のころはまだそれほどでもなかったんですが、学年がだんだん進むにつれて日本は国家主義になり、天皇崇拜が強調されるようになってきていろいろいやな思いというか、私は学校生活というか、小学校は本当にいやでした。学校に行く前になると本当に頭痛とか下痢をするんだよ。下の話で悪いけど。精神的にかなり圧迫されて。

私は高田の附属小学校という小学校に入っただです。

——師範学校の附属。

塚田 高田師範学校附属です。ここは高田市の中ではないちばないい学校ということになっていて、進学率も高

かったわけで、ほとんどが上級校に行く。あのころは中学に入る人たちは少なかったんです。小学校を出る、あるいは小学校から高等科であと二年、それで教育は終わりという人がほとんどでした。中学校には入学試験もあって、そう簡単でもなかったから。私は附属小学校に入って、クラスは小さいクラスでした。三〇人ぐらいかな、はつきり覚えていませんが。師範学校だったから先生たちには県内の模範教育をするという意識が強くありました。実際に私たちの授業にも教生が、師範学校の学生が二・三週間、実習にやってくるというような学校でした。

そういう小さい町ですし、しかも私はクリスト教の教会の子どもだというのはみんなよく知っていますので、それが理由だと私は思うんですが、私が小学校二年生ぐらの時、国の秋季皇霊祭とか何とかといって天皇にまつわるいろいろなことが休日にあるんです。神棚みたいなものをつくって、そこで各クラス代表が榊を捧げる。視学官とかいろいろな人たちが見に来ているわけです。そういうところで私は先生からやれって指名されて、子どもながら心の中で、こんなこと、クリスチャンとしていいんだろうかと思いました。しかし、ノーと言う元気もなくて、結局クラス代表で横にある榊を、枝を取って、祭壇の前でお辞儀をして、グルグルと榊を回して、



そこに置いてくる。それだけの簡単なことなだけで、そういうことをさせられました。でも、私は今もある種の深刻な思いを持っていて、やるべきことでないことをやったように思っています。親にも何も言えなかったんです。学年が進むにつれて戦争が厳しくなって、帝国主義とか皇国日本とかそういうことがだんだん盛んになって、授業もキリスト教に対する批判というか、英米の手先だというふうなことになるっていきました。

私が非常につまらなかったのは国語とか歴史。歴史の中でキリシタンとかいろいろ出るじゃないですか。五、六年生のころはそういう話が出ると、クラスの連中が「塚田、おまえは国賊だ」「スパイだ」とかいろいろ言われました。殴られることはなかったけれど、ときどき廊下の下の、掃除機を入れる、そういうところに閉じ込められたりしました。そういう意味で学校は本当につらい。それでさっき言ったように頭痛になったり、下痢をしたり、具合が悪いと言って学校に行きたくないというようなことで、親をだいぶ泣かせました。私の母はときどき、それがあんまり重なりと担任の先生のところへ行つて、そういうことをあんまり言わないでくれというようなことを言ったようです。先生も「はい、はい」と言っているだけでね。だから私は、小学校はあんまり楽しくなかった。早く終わりたい。でも、成績はそんなに悪く

なかったですよ。

今度、中学校に入ったら軍国主義で、教練とかそういうのがありました。しかも二年の終わりがらいから勤労動員が始まりました。我々は工場に泊まり込んで電気炉の窯焚き。大変な熱さの中で電気炉の、電極がパチパチやっているとところへ石炭を放り込む。立っているだけで着ているものが焦げ臭くなる。帽子をかぶって、作業服を着て、覆面みたいに手拭いで顔を覆ってやっていました。そんなことで勉強もほとんどしなかったから、大学受験なんておよそ、そんなところまではとても行けなくて。学校の先生もどこまで真面目にやってくれたのかわからないけれど、結局自分で勉強する以外に、田舎だから受験勉強というのはない。私は兄貴の使っていた教科書や参考書を見ながら勉強していたわけです。それでも何とか立教には入ったんです。

——当時の予科の入学試験はどういう感じだったんでしょうか。

塚田 入試は英語とか、何ですかね、よく覚えてないんです。英語はあったでしょう。それから何でしょうか、数科目ですよ。あとは面接。ですから、ある程度成績をとれば、あとは面接。それに、クリスチャンであれば比較的入りやすかったんじゃないかと思います。私は先生でなかったからわかりませんが。

——昭和二年の予科の入学ということだと、入学者の方はほとんど、英語はそれまで勉強の機会はなかったんじゃないでしょうか。

**塚田** 中学校は、私たちは二年生ぐらいまで勉強しました。それから戦争に負けて、中学の四年生の夏に戦争が終わりました。その秋から勉強したから、結局五年生になってですね。あのころは四年生からも受験できたし、五年生でもよかった。私は四年生の時には受験してないんです。とてもそんな状況じゃなかった。受験勉強っていつてもわからないから、兄貴の教科書を見ながら勉強していました。東京あたりはどうだったか知りませんが、今のように参考書もあんまりなくて。先生たちも、勉強していなかった連中を四年生、五年生にしても、それは無理な話ですけど。一方通行の話はそれでいいけれど、英語とかそういうのは宿題を出されますから自分でやらなければ。ですから、五年生が終わっても勉強のほうはあまり自信がなかったですね。

——高田中学校に入る時は、学科試験はあったんですか。

**塚田** あったんです。学科試験がありました。内申書ももちろん行ったんでしょけれど、学科試験だけです。私は附属小学校だったから大半は進学しましたが、やはり落ちた人たちはいますよ。それからほかの一般の小学

校からの受験は、行って驚いたけれど、各学校からほんの数人ぐらいいしか入ってこないんです。高田中学というのは上越地方で唯一の、新潟県には新潟中学と高田中学と二つしかなかったんですからね。そういう意味ではエリートだったんです。

——最初、慈恵医大を受けられたけれど、どうも思わしくないというお話が先ほどありました。立教は、いま医学部はないけれど、医学部ができるらしいというようなお話は当時、みんな知っていた話でしょうか。

**塚田** 一部の人でしょう。学生間ではそんな話はあんまりなかったですから。私は興味があつたから、たぶん教会関係か何かから聞いたんじゃないかと思います。結局、後になってあのころのいろいろなものを読んでみると、アメリカのキリスト教協議会、いろいろな宗派の人が集まった協議会で、戦後の日本の教育のためにお金を出して大学をつくろうという話になった。その時に、聖路加国際病院とあわせて医学部をつくるという話と、後にできている基督教大学をつくるのと、この両方の案が出て、結局医学部は金がかかって大変だったので〔国際〕基督教大学ができたんです。この話は後から知ったことで、当時は教会関係というか、キリスト教関係の人たちの間ではある程度知られていましたが、学生たちは……。特に僕らのクラスのいろいろな人たちは、医学部

を目標していたわけでもなかったから、関心もなかったんでしょ。

## 貧しかった学生時代

塚田 大学時代で苦労したのは、お金もなかったけれど、食事です。私は外食をしていましたが、外食券というお米の代わりに食券をくれるんです。食堂に行けば、それでご飯が食べられる。立大をはさんでこの両脇に学生食堂みたいなものがある、池袋駅から来るのと、それからいま小学校のあるあの付近のところに、もう一つあったんです。そこはよく行きました。

「学生時代、お住まいはどういうところに？」

塚田 学生時代はあちこち（笑）。半分居候しながらだつて金がないんだから。

——住宅事情も終戦直後はすごく悪かったと聞いています。

塚田　そうです。だから、恥ずかしい話だけど、兄貴がすでに大学に入っていてこっちに来ていたので、そこにもぐり込んでね。そこは池袋の近くですが、その次は初台かな、初台の、兄貴の友達ということで、そこに入つて。それから、どこに行きましたかね。そのころからミッシェンの、私は聖公会の中部教区の出身でしたから、中部教区はカナダ聖公会が宣教師をずっと派遣して

いたという歴史があつて、戦後戻つて来た宣教師の口利きで国分寺の元岩崎〔彦弥太〕邸〔現・殿ヶ谷戸庭園〕に入つたんです。

国分寺ですか。

塚田 国分寺の駅のすぐ上の、ちよっと高台になっていて、そこが別荘だったんです。ところが、財閥解体でアメリカ軍に接収されて、そこに数人の宣教師たち、アメリカ、イギリスの宣教師がいたわけです。なぜかというのと、岩崎さんの娘さんが聖公会の信徒でね。その人の口利き、世話で住めるようになったんです。そこは立派な屋敷で、建物もヒノキが使われたり、庭も芝生が生えて、ちよっとなだらかな坂になっていて。その一室だったからよかったんですが、私はそこで働いているヨダさんと言ったかな、コックをしている人のところに一緒に入らせて。その片隅に寝泊まりをしたから、彼には迷惑だったと思うけれど。私は国分寺の立派な邸宅の一部にある、昔でいう下男の部屋と一緒に泊めてもらったんです。大きな部屋でしたよ。一二畳ぐらいだったか、そこに泊まったんですが、そんなところでは勉強ができません。いから図書館にしょっちゅう通っていました。

—この上ですか。〔現メーザーライブラリー記念館〕

塚田 二階。あの時、戦後ずっと来ていました。夜まで勉強している人なんてあまりいなかったんです。でも、

私は行くところがないから、ここで過ごしていたんです。ほとんど毎日、午後から夜にかけて、ここで勉強していました。私は勉強といっても自分のやりたいことしかやっていなかったんですが。ここの図書館員とも仲良しになって、名簿を見ないと名前を思い出さなければ、その方は私が教員で来た時にまだ働いていました。私たちよりもちよつと上です。彼は夜学か何か、早稲田かどこかに行っていました。

ですから、この図書館は私の懐かしい場所です。そういう状況だから行き場所がないじゃないですか。帰っても勉強できるような状況ではなかったし、本を読みたくても本を買う金もなかったから。ここならば、すぐ手ごろに本を借りて、夕方になるとみんななくなってしまうから自分勝手に過ごしていました。ですから、ここは非常に懐かしい場所です。ここ、下のほうは教授の研究室だったの。

——はい。たぶん図書館の事務室があつて、時代によるんですが、アメリカ研究所があつて。

塚田 そうそう、アメ研だ。そうでした。アメ研があつて、この二階が図書館で、座る場所もだいたい決まっています、そこで過ごしていました。

——図書館は上履きで入っていたんですか。入り口で靴を脱いで、上履きに履き替えて、図書館に入れていたと

いう話。ご記憶はないですか。

塚田 それはちよつと記憶がないですね。

——国分寺に住まわれていたのは学部に入ってからのことですか。

塚田 そうです。話が前後して申し訳ない。

アメリカ聖公会とイギリス聖公会の宣教師たちがそこに住んでいて、私はそのコックさんのところに同居で入ったんです。ところが、国分寺にいたバイエルというアメリカ人の、東京教区の補佐主教という人ですが、その補佐主教が聖公会神学院の校長になったんです。校長になったということは、ご存じのとおり神学院は焼けてしまいましたよね。ちよつと一軒だけ残っていましたけど。その時に岩崎の本邸（台東区池之端）をアメリカ聖公会が買った。それも岩崎さんの娘さんが聖公会の信徒で、できることならばそういうところで使ってもらうほうが良いということで、岩崎邸をアメリカ聖公会が買い取って、そこに神学院と聖公会の中心の管区事務所が入っていたんです。

そういうわけで国分寺にいる時、バイエル主教、バイエルさんが神学院に移って、国分寺のほうを引き払ったんじゃないですか。それで私に「おまえはこっちに来い」って。まだ立教の学生でしたが、岩崎邸の本邸のほうの一室というか、昔はそこが物干し場だったんです。

物干し場というか、この部屋〔二四・五頁〕ぐらいの大きさで、日当たりがいい。そこに学生を…、神学校に行っていた学生も大学を卒業していませんから、専門学校制度の神学校をやめて全部大学を卒業しなさいと。しかし、行き場がないので今の岩崎邸の一部をそういう人たちの部屋として利用していきまして、私をその仲間に入れてくれたわけです。どこへ行っても居候をして申し訳なかったんだけど、その岩崎邸の物干し場の中でね。でも、日当たりもよかったです、快適でしたよ。

——湯島のですね。

塚田 湯島。あそこは懐かしい場所です。そこから立教に通っていたんです。

しかし最後の年、四年生になる時にそこを、どうしたのかな、明け渡したのかな、理由はわかりませんが、神学生以外は全員出ることになったんです。それで私はまた行き場がなくて、芝にある聖アンデレ教会の元集会所。バラックですが、ここは戦後の元教会の、礼拝していた場所です。そこに広間があって、ピンポンがやれるような部屋と、そのすぐ上に畳の部屋があって。結構大きな部屋で、何畳敷きだったか覚えていませんが、この部屋よりも少し大きいぐらいの部屋があって、そこでもう一人の学生、キマタ君と言っただけ、最後は彼と二人でそこに入ったんです。

本当に人さまのおかげさまで過ごしてきたみたいで恥ずかしいやら、いろいろですが、ありがたかったですね。ですから、私は住居費を払うことなしで何とか過ごしてきました。それがなかったら私はアルバイトとかいろいろなことでどうなっていたか、わかりませんね。最後の、学部の四年生の時はアンデレ教会の元集会所に寝泊まりして、そこから立教大学に通っていました。でも、あそこは芝ですから、お金がないのに結構音楽会へ行ったり、芝居を見に行ったり、楽しいこともしていました。

——ちなみに、予科は修了されているんですね。

塚田 修了してないでしょう。

——途中で新制に切り替わって、これは学部の二年生ですか。

塚田 そうです。予科の二年生から学部の二年生に変わった。ですから、学部三年、予科二年で合計五年、立教大学で過ごしたことになります。

——この辺り、一九四九年、昭和二十四年四月から新制に切り替わる。二年生になるというのはどういうふうに決まっていたんですか。学校からそういうふうになる

と。

塚田 成績次第ですよ。  
——成績によって変わったんですか。

塚田 成績。試験がいろいろあるじゃないですか。落とされる人もいたわけです。

—そういう方は一年生に入るんですか。

塚田 原級にとどまるわけです。

—原級にとどまる？

塚田 落第ということ。

—それが時計台クラスになったということですね。

—学部に移行できなかった人だけ集めて、縣先生がクラス担任をして、時計台クラスというのをやっていたという話を聞きました。

塚田 ああ、そういう話がありました。

—新制立教高校の三年生になると。

塚田 それは立教高校生の話ですよ。

—一回予科に入って、でも結局、及第できなかった人という話ですよ。

塚田 そうそう。その話はちらっと聞いていましたが、あんまり気に留めなかったから、よく覚えていません。

元の立教中学から入ってきた連中がみんな大きな顔をしていてね。人数も少なかったですけど。そのころは大学全体で二〇〇人くらいいなかったでしょう。だから、立教中学からの生徒はみんなお互いに知っていて我が物顔でした。

—予科はやはりあそこの四号館ではなくて。

塚田 予科はさっきのバラックだよ。

—バラック校舎。

塚田 バラックでの教室は二年生ぐらい。学部に入ってここの校舎、本館で授業を。授業はほとんど本館でしたね。予科はバラック。

—予科のバラックは体育館の前の辺りにあった校舎ですか。

塚田 そうです。今は何になっているか。診療所じゃなくて……。

—はい、あのそばにあった……。

塚田 そうです、あそこに並んでいた建物で、その後は一部、学生の部室として使っていたじゃないですか。あれがそうですよね。

—山小屋と言ったりした、あの辺ですね。

塚田 うん。

—先生は最初、医者を目指されたということでしたが、聖職者、牧師になるつもりはなかったんですか。

塚田 牧師になるつもりは、ありました。私はそのころシユバイツァーにあこがれていたんです。それで医者になり、その後また勉強して神学校で学んでというふうに大志を抱いていたんです。

—赤岩栄牧師のお話を聞いたけれど、マルクス主義的な社会活動とキリスト教はどうも合わない、矛盾があ

る。そのように感じたとお話ししましたが、どの辺りに矛盾があるとお感じになりましたか。

塚田 どの辺り？ 社会運動は共産主義、でも、キリスト教の信仰は単なる心とか、そういう問題ではなく、そこには行動とかいろいろなものを伴うものですよ。だから、そんなふうに簡単に信仰はキリスト教、社会活動は共産主義、なんていうふうに分けられなくて、私の行動は、もし信仰者であれば、信仰の中から出てきた生き方とか社会での働き方とかっていうのがあるんじゃないか。それを二つに割り切ってしまうことはちょっとおかしいと私は思っただけです。理論的にどうのこうのことではないんですけど、そこを二つきっぱり分けてやるなんて、そんなことはちょっとできないと思いました。

——特に、唯物論的な哲学とキリスト教が相いれないというふうにお感じになったということではない。それもおありになったのか。

塚田 マルクス主義の研究会に入ったけれど、一年勉強したら、そこで信仰生活と社会活動が結びつく。これが私にとっては一つの生き方だと。だから分離してすべて割り切るなんていう考え方は無理だと思っただけです。

——最後に一つだけ。小川徳治先生がラバーソールを履いてカンニングを見つけないというお話をよく聞くん

ですが、本当にラバーソールの靴を履いていたんですか。

塚田 そうですよ。

——本人は否定しているんです。ラバーソールじゃないっておっしゃって（笑）。

塚田 我々はラバーソールだと信じ込んでいたから。何でもいいですよ。我々は「ラバーソールが来た」って言っていました。こっそり後ろのところから入ってきて、私には少し陰険ではないかなって。

——皆さん、小川先生というのをとおっしゃいます。カンニング摘発の名人であつたことは事実なんです。

塚田 そうです。何人か試験のシーズンごとにあげられていましたから。

——ある意味、とつても正義感の強い方だったのかという気もしますが、その他に矛盾するようなお話も聞くので、どうなのかなと。

塚田 話が戻ってしまうけれど、大学に、一年生に入ってから二学期ごろ、牧師の子どもたち、集まっていた。牧師の子どもはみんな授業料免除で勉強させてもらっていたわけで、集まれというから小川さんの家に行ったわけです。そうしたら、すき焼きをこちそうしてくれてね。あのころのすき焼きって、こつちが見たこともない、いい肉がたくさん入っていて、本当に食べきれない



ほどたくさん出て、ごちそうしてくれたの。でも、私はその時、いろいろ話はされたけれど、何か買収されているような気がして、あんまりいい気がしなかった（笑）。これでおまえたちは学校のイヌになると、そういうふうな印象を私は思ってしまったんです。本人には申し訳ないけれど、そういう印象を持ちました。特に牧師の子どもは学校のあれに協力せよとか、そのような印象を受けてちよっと同調しかねた。それもあってでしょうね、先ほどの話ではないけれどアカがいると言われて、みんながクビになるんじゃないかと心配してくれました。その恐れはあったかもしれないし。

——長時間、どうもありがとうございました。

（二〇一三年五月二日収録）

## 第二回インタビュー

### 神学院時代

——前回は学生時代について、大学生時代のことをお聞きました。一九五二年三月に英米文学科をご卒業になり、この後、神学院に入学されます。神学院に入学されるというのは、いつから決めていたのですか。

塚田 三年生ぐらいから。いろいろ迷いましたけれど、四年生の時にいろいろ考えて最終的には神学院へ行こうかと。でも、弟が立教に学生で来ていて、僕と同じでお金もあんまりないし、育英資金をもらって生活していたから、神学院をやめて働こうかとも思っていたので、そのことを、受験というか、面接の時にちよっと校長に言ったんです。そうしたら、君、そんなことを言っても、新人で大学を出て働いても大した給料をもらえないから、自分の生活でいっばいだよ。助けるなんて言うけれど、それはちよっと無理じゃないか。そういうことなら、あなたに二人分の奨学金を出すから、それを弟に回したらどうかっていう話になり、どうしようかと思ったけれど、結局そういうことになって私はそのまま神学院に進みました。この前に医者になりたいと言いました。その気持ちはあったんです。でも、立教大学でもそっちの方向へ行かなかったし、懷もそうあるわけではないし、半分斜めなんだけど、神学院へ行こうかと。校長がそう言うってくれたので進学したわけです。

当時はまだ岩崎本邸の日本館のほうにいました。大きいのでびっくりした。それからすぐ、その年の夏以降、それまで洋館のほうには、わずかの人数ですけど、アメリカのGHQの機関が入っていたんですが、夏で引き揚げたんです。それで神学院がそっちの洋館のほうに移っ

てね。いま記念館になっていますが、私たちはその二階で寝起きしながらいろいろなところを、そういうふうにつくられていたわけではないから、部屋がたくさんあったから、それを利用して教室とかチャペルとか、そんなふうにして過ごしたんです。そうしたら一年後に沖繩に行くというので……。神学院の話はあんまり関係ないから、いいんでしょうか。

——いや、どうぞお話しください。

**塚田** そのころ沖繩はまだアメリカ軍の支配下にあつて、沖繩にキリスト教の伝道に来てほしいという話がアメリカ人の宣教師からあつたんです。それで神学院の二、三年生が、私よりも前の人たちから二、三年生の中で希望者と言われて行っていました、私もそれに参加したいと思つたんです。それで、あの当時は占領下ですから、伝染病とかいろいろなものがないようにというので身体検査を全部受けたんです。そうしたら胸に肺結核の影が見えるって。まだ人にうつすようなことはないということでしたが。

私は大学生のころから夏休みなどに、小布施に新生療養所という聖公会が経営していたというか、カナダ聖公会の援助でそこが結核療養所になっていました、そこへよく行っていたんです。行くと、そのころは患者さんが一〇年とか一五年とか、そういう人たちがたくさんい

て、療養生活が長いんです。ちょうどそのころから部分切除手術を、悪いところを取つてしまうという技術がアメリカから入つてきましてね。アメリカに行っていた赤星という先生が東京都の療養所、清瀬病院にいらつしゃつて、そこで手術してほしいと。結核だということで内科の聖路加の先生から聞いたんですが、ところがその内科の先生は、手術なんてするものじゃない。現在の手術の死亡率は四%だ。死亡率四%というのはかなり高い。それがあなたになれば一〇〇%だ、なんて脅かされてどうしようかと思つたけれど、私はさっきの療養所で長年寝ている人たちを見ていたから、やはり手術がいいと思つて手術して、二年間休んだんです。今はもつと早いですけどね。

——それが、この一九五五年の病氣休学。

**塚田** はい。清瀬病院で手術して、二カ月ほどしてから小布施の療養所に行つて、そこでずっと翌年の夏まで過ごしたんです。ですから二年間、休学しました。それでまた聖公会神学院に戻つて残りの二年をやつたんです。——五七年に卒業されて、学士の学位授与というのが五九年。

**塚田** 今も一応あるんですが、聖公会神学院に論文を書いて、それが認められれば、外国で言えばBDというやつ。Bachelor of Divinity。それを出すというので私は神

学院の……。でも、それは少し後ですね。私は卒業後一年間、名古屋の学生センターの主事として行っていました。が、聖公会神学院で助手になってほしいと言われてそこを一年で辞めたんです。私は先生はいやだったんですが、行き場がないからね。教会のほうも、そっちへ行けということ、どこにも赴任先を教えてくれないから、仕方なしに聖公会神学院に戻って助手になったんです。その一年間の助手の時に学士論文を書いて、それでBDという学士の学位をもらったわけです。一九世紀から二〇世紀にかけて大いに活躍した英国のチャールズ・ゴアという人について、その人の神学と、その人が多少変化していくので、そういうものを追いつながら当時の神学界にどういう影響を及ぼしたかというようなことを書いて、いちおう認められて神学士をもらいました。

——学生時代の後半のほうで、お書きになっている回顧録では、カトリック共和会の活動にだいぶかわられていたということですが、これはどういう経緯ですか。

塚田 これは大学時代からです。宣教師で来ていたパウルスという、カナダ聖公会出身の人がいます。彼のお父さんは高田の教会で私の父と一緒に働いていた人ですが、その息子さんであるセロ・パウルスが二代目の宣教師として日本に来て、その後しばらく高田、それから新潟で教会の牧会をしていました。彼はその後、聖公会神

学院に移ったんですが、私が大学生時代、彼は高田と、その後、新潟に行っていました、そのころから彼の影響を受けていました。

彼はカトリック共和会という、これはアメリカ人の修道士が始めたグループですが、カトリック共和会というのは、この間も話が出ましたけどマルクス主義とキリスト教の両者を哲学的な方面からアプローチして一致させていく。キリスト者として社会的な運動とかそういうものに貢献しなければいけない。一般に結婚したりして修道会に入らない人は世俗会員ということで、その会に誘われていたんです。私は今もそうですが、パウルス先生に非常に影響され、彼のやっていることに共鳴を感じて、カトリック共和会というのに参加しました。そのほかに学生などいろいろな人が、私と同年配の人たちが参加するようになり、あるいは聖公会の牧師の人たちの中にも参加するというふうで、日本でそういう活動をしていたわけです。

私はもっぱらそのグループのための機関誌みたいなものを出したり、紹介するパンフレットのようなものを翻訳して出版したり、大学生時代は結構それで忙しかつたんです。このグループも、みんな社会に出たり、それを始めた人も亡くなり、社会的にもいろいろ変化してきたので、私がイギリスに留学しているころから少し下火に

なっていました。ちよつと赤岩榮に似ていますが、この人のほうはもつと哲学、神学のほうからアプローチしていて、完全にマルクス主義に従うわけではないけれど、それを神学のレベルの中でどういうふうに総合していくかというようなことを試みていたわけです。

——カトリック共和会に関係を持ったというのは、パウ  
ルス先生を通じてということですか。

塚田 そうそう。

——カトリック自体との関係が特にあつたわけではない？

塚田 そうじゃない。しかし、礼拝の仕方とか、いろいろな考え方は、カトリック的な考え方。カトリックという言葉は、ローマカトリック教会に独占されているわけではなく、聖公会もカトリック教会なんです。ただ、聖公会の中にはカトリック主義を唱える人たちと福音主義を唱える人たちがいて、カトリック主義を主張する人たちはどちらかというと教会の制度とか、私は三聖職位と言いますが、主教と司祭と執事、こういう人たちの下で教会の秩序を持ち、それから聖餐式とかそういうものを中心にしての生活をする。福音主義の人たちはどちらかというと聖書のほうに重点を置いて、いろいろな人がいますが、基本的には個人的な回心というか、儀式よりもむしろ個人の心、人間の信仰的な回心というようなこと

を強調した。

——しかし、私はその両方を対立させて考えることにはあまり賛成しないんです。聖公会の中にも両方ともの要素を持つているんですから。でも、このグループではそういうことの中でカトリック的な立場を強調していた。私も留学して勉強するうちに考え方が少し変わって、もつとリベラルに変わっていったし、このグループもそのころにはちよつとしほんでしまったんです。ですから、大学から、ちよつと留学するころまでで、それ以後は共和会の働き、活動もほとんどなくなりました。

——パウルス先生というのは教役者名簿だと二人いるのですが、シリル・ハミルトンさんのほうですか。

塚田 シリル・ハミルトンさん、この人です。こちら「バーシバル」がお父さんです。お父さんは高田の教会にいて、私の父と一緒に働いていたんですが、その長男の方が戻ってきたんです。私よりも一〇歳ぐらい上の方です。お父さんは後に中部教区の補佐主教になりました。

——ありがとうございます。その後、先生はオックスフォードに留学されますが、この話は聞き始めると時間がかかるので、とりあえず先に進めさせていただきます。先ほどチラツとおっしゃいましたが、神学的な立場がこの辺りでかなりお変わりになったということだけ確

認しておいて、日本に戻られて、一九六三年九月に聖公会神学院の助教授に就任されるということになるわけですね。

塚田 はい、そうです。

### 立教大学神学部構想

——六五年に神学院の教授ですから、一九六〇年代半ばから後半にかけて神学院にいらっしやった。神学院時代については、ここではとりあえず先に行かせていただきます。実は立教大学のほうではこの時期に、六〇年代半ばぐらいにキリスト教学部のようなものをつくるというお話があったようです。それに神学院側はあまり乗り気ではなかったとか反対したというお話があったようですが、その辺りはどうだったんですか。

塚田 私が神学院に戻ってきて二年ぐらいしてからでしようか。

——六五年ぐらいだというお話ですから、時期的にもだいたいいつ合します。

塚田 そのころ竹内寛先生が学科長をしていました。聖公会神学院もあのころは結構スタッフもそろっていたし、一緒になって立教大学のほうに、神学院は神学院としてあるにしても教員のほうは一緒になってファカルティーをつくり、学部をつくってはどうかという

話だったんです。教会側は神学教育というか、神学院というの、ただ学問とかそういうものではなく、将来、牧師として働くための訓練の場所であり、その意味では大学とはまた違うわけです。ですから、ファカルティーとして合併したからといって立教と聖公会神学院とは全く……。

——聖公会神学院が吸収されてしまうことになるけれど、それには問題がある。教会側がそういうことに賛成しませんから。それでも私たちは学部として、あるいは大学院としてやっていくためにはどういうカリキュラムが必要かと、かなり真剣にカリキュラムを議論したんです。

——神学院側で？

塚田 いや、合同でね。当時、神学院もだいぶ新しい方向へ向かって、これまでの神学からもっと社会にも広がっていく神学の傾向が強くなってきていました。それで私たちは外国の神学部の教育課程とか講義の科目とかいろいろなことを持ち寄って、外国で行われている神学教育の改革について研究しました。それは後に私にとつては大変いい勉強になりました。

教育について、きちんと組織的に学生を教育していく。大学は現在もそうですが、どっちかというと先生たちが、教員が自分の専門を教えているということで、教育、神学というものの全体像、段階的教育システムを明

確化し、バランスをきちんと持つてというのとは……。

聖書なしでは神学はできないし、神学は教会とかいろいろなところの歴史を背景にして生まれて、歴史の中で各時代のいろいろなもの、思想とか教会のあり方などをリードしてきたわけです。そういうふうに考えていくと、本当に神学を学ぶためにはそういう背景をきちんと、基本的な勉強の素地としてやらなくてはならない。そのためにはカリキュラムをきちんと用意して、学生たちは一定程度の基礎知識を持った上で自分の専門分野を考えていくという考えでなくてはいけません。

しかも日本では神学というのは、キリスト教学科に入ってきている学生にしても、キリスト教について全く知らない人たちがまでいるわけですから、そういう人たちに對していきなり自分の専門のところを教えても、生かじりというか、偏った一面的なものだけになってしまうのではないか。これは学問としてのあり方ではないだろう。そのようなことで、いろいろカリキュラムについて勉強しました。これは私にとつては非常にいい刺激であり、また勉強になりました。

結局、そういうふうにして話はある程度進んで、大学あるいは学部としてやっていくにはほかの教派の神学、ルーテル神学大とか東神大とかそういうのがあるんだから、三鷹へ移ったかどうかという話まで出たわけです。

——えつ、何が移るんですか。

**塚田** 場所もね。そうしたら交流できる。そうすれば神学的なエキュメニカルな「超教派的な」アプローチも広くなり、狭い自分たちだけの考えではなくもつと広く、場合によっては他の大学の授業も聴ける。このようなことが教育のほうから見るといいんじゃないかという話も出たんです。でも、やっているうちに、キリスト教学科のほうでは学部を、神学部をつくりたいという希望が非常に強かったので、あのころ竹内寛先生が中心になってその案を進めていたんですが、当時の総長であつた大須賀先生が、それはだめだ、無理だと反對して、それでこの話はおじちゃんになったんです。

——これは大須賀総長になってからつぶれたということですか。

**塚田** そうです。彼は聖公会信徒で、真面目な方ですが、大学としてそれだけの力がないというか、立教大学にまた新しい学部をつくつてやっていくということ自体、大変なことですよ。そういうこともあつてでしょう。私は直接伺っていませんからよくわかりませんが、かなり勉強したり、カリキュラムをいろいろつくつてみたりしましたが、結局その話は……。どのぐらいの間、会合しましたかね、何回か合同の会議をして練つたんですが。聖公会の教会側もまた、聖公会神学院が三鷹



のICU〔国際基督教大学〕のほうに行くなんて、みんなの反対が強かったんです。だから、そういう面からも制約があったし、現実には非常に難しかったんです。

——カリキュラムを神学院側とキリスト教学科側の合同でいろいろと検討したということですが、そこで目指されていた新しい学部は、キリスト教学的なものなのか、神学的なものなのか、どちらの要素が強かったのですか。

塚田 神学部でしょう。でも、今の様子を見ても、振り返っても、神学部は無理でしょう。だって、それだけの学生を得ることはそう易いことではないですから。キリスト教学科というのはキリスト教文化も含めて広く開いているからいいけれど、神学部となるとかなり専門化するから、これは現在の日本の状況とかいろいろ考えると無理ではないか。私は直接、大須賀先生と話したことはないですが、たぶんそういうことだったのではないでしょう。か。私自身もそういうことでは半信半疑ながら、神学部として独立することに、立教のほうが熱心でしたから、いちおう参加していろいろ話しましたし、カリキュラムについてはいい勉強ができました。

——これは先生が聖公会神学院にいらつしゃって、立教に移ってくる辺りの話ですが、その前からキリスト教学科はあったわけです。いろいろと資料を見ると、キ

リスト教学科には神学部、ないし神学科になりたいという動きがずっとあったようにも見えますが、その辺りはどうなんでしょうか。

塚田 そうですね。あのころ、大学紛争までは、キリスト教学科は文学部の中で浮いていたんでしょ。先生たちも別みたいな感じであまりコミットしてない。だから、彼らと言っては悪いけれど、キリスト教学科の先生たちは独立したいという気持ちはかなりあったのではないでしょう。

私はその前しばらく非常勤講師をしていましたが、その後、立教に来说いと言われてね。大学で教えるのは私の気持ちからすると、だいたい教師になりたいなんて考えたことのない人間だから、いやだと思っただけです。ところが、周りのみんながうるさくて、それから東京教区の後藤主教からも行けって言われて、私が立教大学のキリスト教学科に移るようになると周りのみんながそうなっていて、結局私も再三催促されて、後に下がれない。周りが皆そうなので、立教大学のほうに助教授として就任したわけです。ですから、申し訳ないけれど、その時はちよつと半身の構えでしたね。

その後、来てすぐその年の秋とか、春先から翌年の春、まだ一年目の終わらない時に紛争が起き出して、とりわけキリスト教学科で言えば速水〔敏彦〕先生と私



が中心になってそっちのほうにずっと……。でも、あのおかげでキリスト教学科の人たちが文学部の中で、我々は知らない学部の中に入って、その中で友人もでき、自由に話し合うようなグループもできてきたわけです。

——逆に言うと、紛争まではキリスト教学科が文学部の中で浮いていた存在だったんでしょうか。

塚田 そうです。

——それはどうしてだとお考えですか。

塚田 両方に責任があるんです。そのころの文学部というのは、実際はバラバラでした。各学科がみな自分のことしか考えない。

——キリスト教学科に限らず、各学科がそれぞれ。

塚田 そうです。

——文学部というのはだいたいどこでも、一歩間違えばそういう傾向になると思うんです。史学科と英文学科と仏文科と教育学科なんか、学問の系統も結構違いますから、放っておくとだいたいそうになってしまう傾向があるだろうと思うんです。

塚田 さっきも話したように、先生たちは専門教育のことばかり考えている。だけど、学生はそれほど専門化してないわけでしょう。まだまだ初歩的な入門のレベルなのに、見えない壁があって、先生もそうだし、学生もそういうふうになってしまふ。それを我々は紛争のおかげ

で破ったわけ。そういう点では、一方ではおもしろかったですけどね。新しい学部の体制をつくり、僕らは学科を超えて親しい人たちがどんどんできて、自由に話し合うようになってきた。そういう意味では大変楽しかったです。

——紛争と文学部改革については結構お話しになりたいことが多いでしょうから、これは次回に回すとして、今回はもうちょつとキリスト教学科のことについて続けたいんです。

塚田 そうですか。

——私などから見るとキリスト教学科、特に紛争前のキリスト教学科の性格がいまひとつよくわからないところがあるんです。キリスト教学科、つまり神学部神学科を名乗っていないので、純粹な学問としてキリスト教を学ぶところなんだ、研究するところなんだという印象があります。普通に考えればそうですが。そうかといって当時の人の話を読んだりすると、例えば菅岡吉先生は、キリスト教学科にする時、「私は率直に言うと神学科と言いたかった。でも、やはり一方で聖公会神学院があるから、それがある意味はばかってキリスト教学科にしただけなんだ」とか、そういうことを書かれたりしています。だから、そういうふうなものがある程度ずっと、特に神学部にしたという動きが紛争前にはかなり強かつ

たのかなという気がしています。

**塚田** そうですね。竹内先生が僕を神学院にアプローチしたのは、学部としての体裁からいっても、それにはもう少しスタッフをきちんと整えたい。神学院のスタッフ全員でないにしても、資格のある人たちが一緒になれば立派な神学部ができるのではないかと期待しておられたんだと思います。おっしゃる通りに、文学部に属しているても文学部はバラバラで、むしろそれぞれがそれぞれのやりたいことをやりたい。ですから、できることなら神学部を、特に神学というのとは違ふ側面もあるから独立したいというのは、年来の希望だったでしょう。

——実際に神学院と合併して新しい学部をつくるという動きをした。ところが、先ほど聞きそびれたんですが、聖公会としては反対だったということですね。

**塚田** 聖公会としては、そうです。神学院というのは聖職者養成の場所であり、神学者養成の場所ではないわけです。だけど、神学を知らずして聖職者にはなれないから神学者が教えるわけ。しかし、それだけではなく、あそこで寮生活や、礼拝など、そういうものを通して、将来聖公会の聖職者として考え、また行動していくような人間を育てたい。それが聖公会神学院の目標です。

学問のほうだけを強調しているわけではなかったんです。学問も大事ですが、学問を目当てに勉強しているわ

けではなく、いろいろな働き方があるでしょうけれど、将来、教会のために働く人たちを育てたいというのが目的です。各教区の主教会というのがありますが、その主教会などでもそういう動きに対しては反対だったんです。

——角度をちよつと変えて考えると、例えば神学院は現在、用賀にありますが、結構先生方がいらつしやいます。ところが、学生というと指折り数えるぐらいじゃない。しかも結構広い土地で、あんな感じですから、恐らく聖公会にとつてはかなり財政的な負担になっているかと思うんです。神学校はどこでもそういうことだと思いますが。そうすると、それを立教と合併させて立教大学に聖職者の養成機能を持たせれば、聖公会としては財政的に楽になるというような考え方はなかったんですか。

**塚田** それも多少はあったでしょうね。だから、聖公会神学院の教員全員が新しい立教大学の神学部の先生になるというわけではない。必ずしも大学の先生としての資格とか、あるいはそれだけの専門教育をしているわけではないから、いろいろな人がいますから、そのまま一緒にいるというには問題もあったし、それから神学院の目的はそれだけではないわけで、プラスアルファというか、むしろそっちのほうが大事なんです。学問は二の次

と言うと語弊がありますが、学問があるに越したことはないけれど、学問のために来ているわけではない。だから、そういう意味では教会側は必ずしも賛成していなかったんです。それは当然だと思います。

先生たちの一部は、私はその後、立教大学の教授としてキリスト教学科で教えながら聖公会神学院のほうの授業も担当していました。あそこに住まわせてもらっていましたが、給与は立教大学から払ってもらって、そういう意味では神学院は助かったわけです。私のこんな話をしているかどうか知りませんが（笑）。速水先生もそうでした。だから、私たち二人は立教大学から給与をもらい、神学院のほうには住まいだけを供給していただけで、そこで授業を持っていたんです。

でも、これではどっちつかずみたいになってしまわうけれど、やはりあそこに専任で誰かがきちんとやっていかねければいけない。その意味で、そういう人たちがいたわけだから。我々はどちらかといえば勉強の方面からのサポートをしていたと言えるでしょう。でも、神学院の中に住んでいればみんなと同じように生活に参加しなければなりませんから、その点では負担も多かったですね。

### 「キリスト教倫理」選択科目化

——神学院からこちらに移られてきて紛争が起きます。

今からお聞きすることはキリスト教学科とは直接関係ないことですが、この紛争の後のカリキュラム改革で、それまで必修だったキリスト教倫理というのが選択制になります。この必修から選択することに関して学内的に議論になったかどうかについて、ご記憶はありますか。

塚田 それは一般教育の科目でしたから、我々の正規の議論にはならなかったんです。個人的にそういう話はしましたが、学部としての問題ではないので。一般教育部の考えとかそういうことも伺いましたが、一般教育としてそれをやるか、やらないかというのは一般教育部が決めることだと私たちは考えていました。でも、私たちも一般教育のキリスト教倫理という名称の科目を受け持つて授業も何年間かしてしまして、無理やりに学生に強要しても、来て座っていても、聴いてないとか内職している人たちも結構多かったから。

教育の面からすれば、教員の側からすれば、本当はそういう人たちを奮い立たせて、自分の話に興味を持たせるようにしゃべらなければいけないんですが、ある時はそういうこともあるけれど、すべての主題について学生が興味を持つわけではないから、授業をやっていくこと自体も教員の側にとってもかなり工夫の要る、負担の多いことでもあったんです。私は一般教育のほうでどういう議論をしたかはわかりません。ちゃんと聞いています。

ん。

——個人的にはどういふふうなお話を……。個人的には多少お話しされることがあったということでしたが、今のようなお話ですか。

塚田 文学部の教員の間でね。あのころ文学部と一般教育の間の交流もあんまりなかったもので、個人的に付き合いはあっても、話し合いをするとかそういうことはほとんどなかったんじゃないですか。決していいことではないと思いましたが。その先生にもよるんですけど、私が来たころの文学部のキリスト教学科、これはキリスト教学科だけに限りませんが、学部と一般教育の先生との間には何か見えない壁がありましたね。

——今までいろいろな方のお話を聞いてきましたが、仏文なり英米文なり、一般教育の先生との関係ではそういうところがあったということはだいたい一様におっしゃいます。キリスト教学科と一般教育部のキリスト教の先生との間にも、そういう関係があったということですか。

塚田 反目するとかそういうことではないけれど、私は個人的には何人か親しく話をする人たちがいましたが、学科の交流とか働き方について話し合うようなことはほとんどなかったです。ですから、今から考えれば、そのころもそう思っていました。が、いったい何をやっている

のかなって。お互いにそういうことでやや批判的というか、斜めで見ているようなところもあったと思います。お恥ずかしい話ですが。

### 神学士か文学士か

——あとは、紛争後の七〇年代の話として、当時キリスト教学科を卒業すると神学士の称号が与えられていた。これを文学士に変更したいという議論が何回も何回も出てきています。どういう経緯でそういうことになったんでしょうか。

塚田 簡単に言えば、神学士と呼ぶほどの勉強をしているんだらうか、ということ。キリスト教学科を卒業したといっても、よく知らないまま卒業している人たちがたくさんいたし、ノンクリスチャンも結構多かった。今もそうかもしれないませんが、キリスト教学科ならば大学に入りやすいから、志願者が少ないからと。そして、一定程度の定員を満たそうとすると試験の成績もやや落ちる。あんまりひどいのは採りませんでしたけど。

それに、神学士と呼ばれるような勉強はしていない。そういう勉強をしている人もいるし、そうでない人もいる。そこで、後で選択みたいにどちらかにするというふうな話も出てきたんです。しかし、これは尾形総長が反対しましたね。神学士としてきちんとやったほうがいい

と。私はそのころ学部長だったと思うんですけど、部長会でその議論をした覚えがあります。尾形先生はキリスト教学科としてきちんとやるべきだという考え方が非常に強く、それこそこの話を歯牙にもかけないようなことになり、結局立ち消えみたいになったんです。その後にまた変わったのかな……。忘れちゃった。

——おっしゃるとおりこの議論は、パツと消えてしまっているんです。この時にどうして立ち消えてしまったのかなと気になったものですから。今のお話だと尾形総長が反対されたから消えたということですね。

塚田 どちらかというと、そうです。

——キリスト教学科の内部的にはどうだったんですか。みんなそれで一致していたんですか。

塚田 それはいま言ったように、神学士と呼べるだけの勉強をしていないのではないかとということ。それと紛争の後、カリキュラムをかなり大きく変えました。特定学科に限らず他の科目もとれるようにして、むしろ文学的な部分をもう少し、全体に通ずる、学科を超えての文学部というか、カリキュラム自体がそういう系統の勉強を広く認めていくような形に変わっていったんです。その点から見てもキリスト教学科は、神学士というより文学士のほうが適当ではないかというような考え方が出てきたんです。これは特に野呂〔芳男〕先生の主張でした。

学科の中でも議論して、私はその時に学部長をしていたから、いつもコミットしていたわけではないけれど、どちらでも選択できるような、あるいはそれをこちらが希望してどちらかにしたほうがいいとか、そのようなことにしたらどうかと思っていました。

——そうすると、この問題は紛争後のカリキュラム改革とも深くかわわっていたことになりますね。

塚田 そうです。

——紛争後のカリキュラム改革というのは、お話を聞き始めると結構長くなると思うので、次回に持っていきたいと思います。

### 海外留学の経緯

——では、留学された経緯というか、その辺を伺えたら。

塚田 留学した経緯ですか。私は留学したくなかった。する気持ちもなかった。私はあのころ聖公会神学院を卒業して神学院で働いていましたが、アメリカ聖公会が戦後の日本の教会、聖公会の人たちにもう一度きちんと勉強してもらうのがいいんじゃないかというので、アメリカなどの神学校に留学させるということに、アメリカ聖公会のほうで積極的に動いていたんです。それで、そのころはかなりの人たちがアメリカの神学校に行っていま

す。私より少し上の年代の人たちは、ほとんど留学しているんです。ああ、あの人が行ったけど、果たして勉強ができるのかなって。ことに語学上で、というような人たちもいましたが、留学させていました。留学するとみんな神学校に入るんです。私は聖公会神学院で三年も勉強したから、またアメリカの、程度は別としても神学校へ行くのはもういやだと思って、薦められても「私は行けません」と言っていたんです。

聖公会神学院の教授にハンマー先生とワイブレー先生というお二人がいらつしやって、二人ともオックスフォード大学卒業ですが、このハンマー先生が何度もそういうことを言われるんです。でも、いや、神学校は行きたくない、ここで十分だって。私は学者になりたいなんて思ったことがないからと言って、逃げ口上で「大学ならば行きます」って言ってしまったんです。これが過ちの元でね（笑）。そうしたら「そうですか」と言って、こちらを忘れたころ、二―三カ月だったか、もつとだったかもしれませんが、ハンマー先生が「あなた、オックスフォード大学に願書を出してください」と言うんだ。えっと思ってね。私は「大学ならば行きます」と言ったけれど、まさかオックスフォード大学へ行くなんて考えたことがなかったから、びっくりして。

大学時代の成績とか、私が向こうへ行ったらどうい

勉強をしたのかとか、もちろん聖公会神学院での成績とか、私の神学士の論文もあったので、そういうものをそろえたいというので、私はいささか悩んだんですが、どうせだめだろうと。だから、いちおう形だけでも出そうかと思って、立教の成績と、どういう勉強をしたのか。どういう勉強をしたかというの、神学士の学位を、神学院で論文を書いていたものの延長線上に、もう少し広い視野から見たいというようなことを書いてハンマー先生に渡したんです。それからだいぶたって、どうせだめになったろうと高をくくっていたら、大学が受け入れることになったから用意しろという話になって、私はもうびっくりです。自信もなかったし、向こうへ行っても勉強しても成果が上がらないようではおめおめと日本にも帰ってこれないし、そんなことまで無理だって。

私は肺結核をやってから病気がちでしたから。体が、毎週一度薬を飲まないとアレルギーで全身にじんまじんがすごいですよ、腫れ上がって。薬を飲むと眠くなったり何かして気力がなくなってしまう。それに手術してからの後遺症で頭痛と目がおかしくなっていたんです。こういう本などを読んでいると半分しか見えない。普通は片方の目でも両方見えるじゃないですか。ところが、脳のほうが働いていないから、脳の像がぴったり半分になっってしまう。こうやって見ると、半分は見えるけれ



ど、あとの半分は真っ白で何にも見えないんです。そのようなことがときどき起こる。それから、頭痛もあつたけれど、めまいがする。私は結核をやつてから、そういうのが一〇年以上続きました。

ですから、留学している間もそれで悩まされました。薬をもらつてじんましんは抑えられたけれど、めまいとかは医者に行つても「そうですか」と言われるだけで、そういうものに対する薬はなかつたというか、わからなかつたんですね。半分、目が見えなくなる。これもどうしようもない。そんな状態でしつたら、留学しても勉強するのは身体的に無理だと思つていたこともあるんです。だから向こうへ行つても、勉強は一日最長五時間する、それ以上はしないとちゃんと決めていました。勉強は昼間で終わりにして、夜はあちこち散歩して歩いていました。音楽会へ行つたり、頭痛をだますために気を紛らせたり休んだりいろいろしていました。留学している間もそうでしたし、帰つてきてからもそうでした。その後も何年かそれが続いたんです。じんましんが本当にすごかつた。体中が腫れ上がつてしまふ。そんなことで留学はあんまりしたくなかつたんです。そう言つと、皆さん、信じないんですが、本当にそうだったんです。

――神学院で教職に就かれることにもあまり気が進まなかつた。留学して学問をするのもあまり気が進まなかつた。

た。塚田先生としては基本的に牧会に従事したいというお気持ちがいちばん強かつたということですか。

塚田 私の名古屋の学生センターにいましたが、その仕事を続けたかつたんです。

――要するに、学生キリスト教運動を。

塚田 学生を集めて、あそこで名古屋大学の学生とかそういうのを、僕らは初めて行つて開拓伝道みたいなことをしていったんです。それがある程度軌道に乗るようになってきたから、続けたいと思つていました。私の気持ちは牧会というより、学生キリスト教運動。学生のためにそういう仕事をしてみたいというのが私の希望だったんです。

――立教大学に在学中から学生キリスト教運動にご関心があつた。そのずっと延長線ということですね。

塚田 延長線です。

### 三鷹移転構想の意図

――もう一つ、先ほどお聞きした中で、神学院とキリスト教学科の合併話、神学部構想のところ、どこかに移転させるといふお話がチラツと出てきましたが。

――あそこでしょう、東京神学大学のところ。

塚田 ルーテル神学大学。三鷹ですね。

――そのところがよくわからないんです。新しく学部



をつくる。立教大学の神学部をつくる。神学院を用賀から移して、キリスト教学科も池袋から移して、それで三鷹の神学大学の辺りに持つていくという構想ですか。

塚田 そうです。なぜかという、それがアメリカの新しい動きだったから。いろいろな教派の神学校が集まって、学生たちもある程度交流できて、図書館なども共同の図書館を、立派な図書館をつくる。私もアメリカへ行つて、特にカリフォルニアとか新しいところはほとんどそうでした。学生も交流するし、先生たちも交流する。それぞれの学校には優れた先生もおられたわけだから、自分の専門分野で聴きたい講義も、ほかの、属していない学校の講義を聴くこともできる。アメリカあたりではそういうのがあちこちで始まっていた時代だったんです。我々もし合併するんだつたら、そういうふうなやり方がいいんじゃないかと考えたんです。

——三鷹に集めるというプランは、アメリカ側が主導して。

塚田 いやいや、そうではない。

——そうではなく、アメリカの潮流としてそういうものがあつたからということですか。

塚田 アメリカ側というか、もうすでにICUとルーテル神学大が向こうに行つて、多少誘いもあつたと思うんです。キリスト教大学もあの付近にあるし。

——確かに集まっていますね、あそこに。

塚田 我々、エキユメニカル運動と言いますが、教会合同運動といつて、みんな一緒にいろいろなことをやろうという時代的背景もありました。もしそうであれば、いつそのことそちらへ移つてやつたらどうか。ところが、聖公会の主教会は保守的で、それには賛成できなかったんです。立教のほうも大学の総長をはじめ、あまり賛成でなかったから、結局その話はつぶれてしまいました。よかったか悪かったかわかりませんが、そうすればだいぶ違つていたと思うんです。

——立教における神学教育は変わつていたかもしれませんが、池袋キャンパスからキリスト教関係の学部が抜けるというのは、その後の立教大学を別の意味ですごく変えただろうと思います。

塚田 たぶん大須賀先生が反対されたというのは、そういうことだと思います。確かにそのとおりで、キリスト教学科があり、キリスト教学科の先生がいる、学生がいるというのは、大学全体の、総合大学としてはどこへ行つてもキリスト教学科というか、神学科というのがみな大学の中にあるわけだから、その部分を失うのは建学の精神を失うことになるかもしれません。

——この合併話は基本的に三鷹への移転が一つセットとして、話としてあつたということですね。

塚田 あこのころの文学部キリスト教学科というのは孤立というか、自分たちのことしか考えていなかった。言い方は悪いかもしれませんが、そういう感じがします。

——さて、この後、時代的には紛争とその後のカリキュラム改革などに入ってしまったと思いますが、おそらく長くなりますので、次回にお聴きすることとさせていただきます。ありがとうございます。

(二〇一三年五月二三日収録)

### 第三回インタビュー

#### 立大着任、そして大学紛争

——前は紛争の前あたり、先生が聖公会神学院から立教に移ってこられる辺りまでお聞きしたと思います。今日は、こちらに移られてから間もなく大学紛争が起るわけですが、その後、紛争に対処されて、文学部のカリキュラム改革とかそういうことをされていきます。その辺りについて伺いたいと思います。

塚田 立教大学に来て、その年一年間、そのころは各学科がみな、学部の中もバラバラで、相互に交流するような雰囲気もなく、私はキリスト教学科に入ったんです

が、ほかの学科の先生たちと交流するような機会もあまりなかったんです。その年の暮れぐらいから人事の問題でゴタゴタが始まり、間もなく紛争が始まります。学生のストライキがあったり、団体交渉みたいなことをやりたり、いろいろ続いたわけです。

これにはもう参りました。私は立教に来たばかりで事情もよくわからなかったし、一年いたけれど、自分の学科のことぐらいいしわからなくて、ほかの先生との交流もなかったんです。最初の団交が何かの途中で学生にいろいろ追及されているうちに、その時は細入先生が学部長だったんですけれど、団交の最中に細入先生が突如「私は辞めて、松浦先生に代わってもらおう」と。何の事前の話もなしに松浦〔高嶺・イギリス史〕先生を指名して、彼は学生との対応に立たされたわけです。松浦教授の対応はなかなか見事で、非常に上手に、しかし学生と誠実に対応されたと思います。結局、細入先生はそのまま病気みたいにな、本当にそうだったかどうかわかりませんが、松浦さんには学部長代理、その後、学部長ということになっていただいたわけです。

団交の時、私は立教に来たばかりで事情もよくわからなかったから、できるだけ目立たないようにして、とにかく後ろのほうに座ってみんなの団交の対応を……。その時からはずきりしてきたことは、若い助教教授レベルの

人たちが前面に出ていたことです。古い方は教授会でも「私たちは、古いのは後ろに下がっていますので、よろしく願います」とか言ってますね。ぬけぬけとそんなことを言う教授もいたりして、松浦さんが音頭をとって団体交渉に対応していました。

我々は泊まりがけで、どういうふうにやっていくか。今後の問題をどう考えていくか。フランス語のカリキュラム問題がこの問題の発端ですから、いろいろとカリキュラム問題もあったし、渡辺「二民」先生のインタビューにもありましたが、その時点でカリキュラムをもう一度見直す。それから、学部全体としてのカリキュラムのあり方をもっときちんと考えなくてはいけないのではないか。私の記憶では、その時に前向きになって学生と対応するという姿勢が一つで来たのではないかと思えます。また、そのようなことが機会になり、他の学科の先生たちとも親しく交流するようになりました。

私は立教に来たばかりでいちばん新しかったんです。速水先生はその時、チャブレンで、キリスト教学科の教授になったわけですから、同じ時になったんですが、彼は立教ですでにチャブレンとしておられたから先生方もよく知っていたんです。私は先生たちの名前もわからないし、小さくなっていました。団交で何回か徹夜したこともあります。カリキュラムを、とりわけフランス語

の、予定している先生の名前を黒く塗って、そこに代わりの先生の名前を書いたというのが紛争の発端になったのですが、もう一度、文学部全体のカリキュラムと仏文の出直しのカリキュラムですね。仏文は先生がいなくて、専任がわずか三人か何かで、大変だったんです。

この時は松浦さんが学部長で、その後、各学部、学科の若い人たちが、史学科の高橋「秀」先生とか、教育学科の室「俊司」先生とか、速水先生とか、私も入れて七人だったから我々は七人組と言ってますね、カリキュラム改革ということを考えるようになったんです。もう少し全学科、学部的な発想の中で考えていく。それから、ある程度の段階的な教育。先生が好きなことを授業するのではなく、学生を育てていくプロセスがあるんだから、きちんと段階的に教育していくというカリキュラムにしていくなことが大事だと。このカリキュラムをつくっていく段階で私も多少発言するようになりました。

ちょうど私は、前回お話ししたようにキリスト教学科と聖公会神学院との合同というか、神学部をつくるというふうな話から、カリキュラム問題についていろいろ勉強したんです。これは立教で考えていく上で大変に役に立ちました。団交は何回やりましたかね、四、五回やったでしょう。私は人の前でしゃべるのは得意でないし、自分でもいやだったし、多少神経質だったから後ろ

で小さくなっていたんですが、若かったこともあり、その仲間に入ってカリキュラムをつくり、学生との対話を続けていきました。前後関係がはつきりしないんですが、学生との対話集も何回かやりました。

——それは文学部の学生と、ということですか。

塚田 そうそう、カリキュラムについてね。学部長の松浦先生が学生たちに、我々は学部の各学科のカリキュラムを学生に提示して、それに対しての学生の意見を聞いて、疑問があれば説明し、あるいは訂正すべきところがあれば訂正する。同時に、教授会として、どういう考えでこういうカリキュラムを組んでいるかということの説明集会をやって、学生の意見も聞くということを始めただけです。教授会としても学生との初めての対話でしたから、その場もみんな若手の先生たちだけがやって、年寄りの先生は後ろに控えている、あるいは出てこない。そのうちに年配の先生が辞めていったりして、若い、我々七人が学部全体を引きずっていくような形になっていきました。

キリスト教学科でも同じように、カリキュラムの改革をやらなくてはならないということになっていきました。これもまた、古い先生たちは自分のやりたい専門のところをどうしても強調されていますが、我々としてはもうちょっと教育的配慮をした段階的な教育というふう

なことも考えて、カリキュラムを変えていきました。これは学部としては一つの大きな転機でした。

### 文学部カリキュラム改革

塚田 その時だったか、はつきりしませんが、学部全体の学生のための読書指導だったか、何という名前か忘れましたが、講読かな、何かの授業を一年生の時にやる。これは別に学科制ではなく、学生を募ったのではないかな。はつきり覚えていませんが。

——文学部全体で。

塚田 そう、全学生に。文学部の新入生に。一年間、講読の授業（共通基礎科目）をつくって、本の読み方とかいろいろなことを指導して、そこで以後の勉強のやり方というふうなことを教えるといったこともしました。従来は先生たちが自分の専門だけを教えていましたが、現在の学生たちのレベルとかそういうものを考えて、そういうところから始めていくことにしたわけです。

そのころから徐々にカリキュラムを変えていったから、いつ、どういうふうになったか、あまり記憶していませんが。渡辺先生も言及していましたけれど、夏休みか何かに八王子で、これも学科ではなく学部の学生を対象にいろいろなテーマでやろうと（集中合同講義）。これは私が提案したんですが、初めての試みでもあった

し、違う学科の先生たちをそろえたわけだから、せっかくやるんだから相互に理解を深めた上で、みんなで授業をやらうと。それで事前に教員だけの勉強会を三〜四回、毎回やりましたかね。

——そのためにですか。

塚田 そのために。テーマを決めて、我々はそれぞれ本を読み、レポートしてみんなの前で代わり番に、教員だけの集まりですが、それぞれ自分のやらうと思っていることを報告し合う。あらかじめ相互に、それぞれどういう問題を考えるか。大きな課題をつくって、その後それぞれ先生たちが発表して、どういうアプローチをしていくかというようなことを聞いて、そしてまた相互に意見を交換する。このようなことをして準備しました。私は三回ぐらいディレクターをやりましたかね。ディレクターをやっている間はそれも続けていましたし、その後、数年は続けていたと思います。

でも、多くの先生たち、いやなんですよ。みんな教育のために時間を割くなんて無駄遣いだと思っているから。教育する大学にしながら本気で、学生のいろいろなレベルを考えながら教育していく、育てていくというところは、私は今もそうだと思うけれど、先生たちはあまり好まない。自分のやりたい研究をやりたいというほうに重点を置いていたから。ですから、このような準備会

をやっても、最初からそんなのいやだと言う先生が結構たくさんいて、結局、若い人たちが集まってそういう会合を……。

私はそういうやり方をほかのところで、ほかの大学でいうことではなかったんです。オックスフォード大学でそんなことをやっていることもなかったですから。オックスフォード大学は大学に入るとほとんどこちらの大学院クラスです。レベルが違うから参考にならない。向こうは高等学校時代にそういう勉強をしているんです。私はむしろ学生たちのそういう準備的な勉強、同時に先生同士の、自分たちの狭い分野だけしか考えていない我々のあり方について互いに考え直していく。同じ一つの主題に対してどういうふうに考えていくかということを先生同士でも議論し、学生と議論しよう。

毎回、先生たちは順番に自分のやっているテーマを報告する。全体のテーマは同じですが、それについてのそれぞれの専門分野を主眼にしながら話をする。その後、議論とか相互に理解し合うということで学生たちが集まる。教員は場合によつてはそれに参加する。はじめから終わりまでということではなく、場合によっては質問とかいろいろなことがなければほかのグループに参加する。そのようなことを八王子で始めましたが、これはおもしろかったですね。

学生とやるだけではなく、最後に学生たちの前で先生同士がそれぞれの発表について議論したのですが、これは先生によつてはいやだったでしょうね。でも、これに参加した人たちはどっちかというと若手ですから。もっと広い視野で考えていこうという人たちがいたので、みんなおもしろかったんではないですか。少なくとも最初の四〇五回は楽しくやりました。グループで、泊まりがけでやる勉強というのは、私は学生時代にキリスト教活動をしている時にそういう機会がいろいろありましたから。

――修養会みたいなものですか。

塚田 例えば私は大学の四年生ごろに、関西と東京の学生が集まって大阪で労働ゼミナールというのをやっただけです。昼間はみんな各工場へ行つて一カ月間働く。夜は勉強会。また関西の教授たちから労働問題とかいろいろな問題についての話を聞く。そしてまた議論していく。こういうのに参加して、大変でしたけど、いい勉強になったんです。私はそういう経験から、合宿して異なる分野の人たちと議論する。学生ばかりではなくて先生たちもやる。こういう方式を考えてみたらどうかというところで始めたものです。

渡辺（一民）先生が言及しているように、みんな楽しかったと。準備も大変でしたし、大変でしたけど楽しかったと。最後に必ず、午後には八王子の山と一緒に登

るという遠足をやってみんなで気分転換。そういうふうにならぬ議論をやる。私は各先生の出した問題について適当に批評して大変失礼したこともあります。ディレクターはその時に全体をまとめる。その会合は本当におもしろかった。だから、それに積極的に参加した人たちはまたやろう、またやろうと言って皆さん、何年か参加しました。室俊司さんとか、渡辺先生とか日文の前田愛先生、学部長をしていた松浦先生とか、そういう人たちが積極的な参加者でした。

今まではどちらかというと学科別にそれぞれ勝手にやっていたのが、もつと学部全体として教育をする。また、学生ばかりではなく先生同士の交流、勉強会をやる。分野は違つていても一つの課題についていろいろなアプローチの仕方があることを教員自身も学び返す。こういう機会としてこれは非常に役立ったと思います。それ以後、それに参加した人たちの間の結束とか、授業の話し合いとかそういう点では学部の雰囲気もずいぶん変わりました。学科ではなく学部として教育していくという考え方ができたのではないかと思います。

## 学部長に

塚田 そういう中で私が、まだ若かったんですが、立教



に来てからそう長くなかったんですが、学部長にさせられて……。

——一九七五年からです。

塚田 立教に来たのは何年ですか。

——六八年です。

塚田 じゃ、もう七年はたつんだ。

——でも、ずいぶん早いですよ。

塚田 これも本当になぜ私になったのかわからない。私はいつも教授会で小さくなって発言などはしたことがないし。

——ほかの先生が書かれていますのは、別に小さくなっているわけで、わりあい最初のころから、いろいろなところで発言されていたということとどこかで読みました。

塚田 そうですか。いや、そんなことはないと思うんだけど（笑）。なぜ松浦先生が僕に目をつけたのか、わからない。松浦先生が部長でいる時は心臓が悪くて、体をこわして。

——そうでしたね。

塚田 あのころは団交とかいろいろなことで学部長は大変でしたから。団交もあったし、部長会も外でやったり。総長室に学生が、あれはどこのセクトでしたか、それが来るのではないかというので八十二銀行の会議室を

借りたり、あちこちで会議室を借りて、毎週の部長会をしばらく外でやるようになったんです。

——それは先生が文学部長になられたころですか。

塚田 うん、多分文学部部長になってから。

——中核派が入ってきたのがたしか七五年ぐらいではなかったでしょうか。

塚田 松浦さんの時からそういうのをやっていましたかね。記憶にないんですが。あの先生が、総長が、名前が出てこなくて申し訳ないけれど、元海軍経理……。

——尾形（典男）総長。

塚田 彼が総長でしたが、そういうことから外で……。松浦さんの時もそうだったかもしれません。彼は心労で結局、心臓の弁が悪くなって、ブタか何かのあれでオペをしたのかな。彼は調子が悪い時に私と渡辺さんの二人を部長補佐にします。何の手当もない部長補佐。

——それは制度がなかったわけですよ。

塚田 ない。そんな制度など何にもない。手当も出ないし、何もない（笑）。

——渡辺一民先生と塚田先生が部長補佐に。

塚田 そうそう、松浦さんの最後の一年二年ね。彼が具合が悪くなつてね。僕らが松浦さんが部長会から帰ってくるのを部長室で待っていたりすると、結構遅くて、終わるのが八時とか。そうするとハハハ言って松浦さん



が帰ってくる。ちょっと気の毒で見えていられなかった。それで彼の病状がよくわかったんです。

ちょうどそのころ、文学部ではただ単に学生だけではなく、学部各学科にいた女性たち……。

——副手ですか。

塚田 副手。副手制度。副手の女性たちがみな集まっています、この制度はおかしい、何とかしろと突き上げてきて。それで、前後して悪いけれど、松浦さんが私に副手の対応をやってくれというので、私を学部長補佐にね。私設ですよ（笑）。私設の学部長補佐にさせられて、副手をどうするか。副手たちはあわよくば専任にしろと言う。

副手というのは補助員で、学部の、学科の本の整理とかいろいろなことをやってくれて、我々にとっては大変便利と言ったら悪いけれど、助けになる役でした。その副手たちというのは、だいたい各学科でこれぞと思うような人に、嫁入り前の数年間でいいから来てくれといつて、わりと優秀な人たちを採用していたんです。だから、きちんと就職しないけれど、しばらく働いてもいいと思われるような人たちが副手になっていたわけなんです。ところが時の流れみたいなものがあって、その人たちがこの制度、おかしい、何とかすべきだといって待遇改善のような、ストライキまではやらなかったけれど、

とにかく突き上げられたんです。私は松浦さんに命じられて彼女たちと団体交渉みたいなことをやるようになったんです。

ただ、それだけではなく今度、そのころには全学の副手の会が……。今の副手は、どういうあれかわからないけれど、理学部にもいたし、経済にもいました。今はどういう位置づけか知りませんが、副手、いるんですか。——もういいんです。

塚田 いないでしょう。副手制度というのはどっちつかずの職種で、学生上がりのお手伝みたいな形。経済などは、それが助手とかそういうものになっていく道順になっていましたが、文学部ではそういうことでもなかったんです。ですから、その後どうするのか。副手を数年やって辞めるというケースをみんな期待して副手を頼んでいたけれど、そういう人たちがずっと続けて仕事を、立教で働きたいという希望を持って、副手制度はおかしいんだということで、彼女たちは大学の労働組合に入り、ますます先鋭になっていったんです。

結局、副手係の私が彼女たちの意見を聞かされ、どういふふうに解決していこうかということになりますが、いちばんの解決は彼女たちを専任の職員として採用する。それが彼女たちの望みでもあったし、身分保障にもなりますから、学校の身分保障としてはその線でしか考

えられない。ところが副手は理学部にもいたし、経済学部にもいた。私は文学部の副手だけの問題と想っていたけれど、そうじゃなくて、全学の問題に広がっていったんです。全学の副手問題委員会みたいなものができて、ほかの学部からも副手制度、おかしいと突き上げられてね。私は伊達さんと交渉して、名称はともかくこれを専任化する方向で考えてくれって。

ほかの学部からまいぶ突き上げられたり、いろいろありました。学科ごとに副手がいるのはゼイタクというか、文学部がいちばん恵まれていた状態でもあったので、副手問題の検討会に出ると、ほかの学部から私はその矢面に立ったわけです。議論した後、総務部長にお任せということになったんですが、その結果総務部長が、じゃあ専任化することになって、彼女たちにとっては望外の喜びだったわけです。ですから、私の株は一挙に上がりました（笑）。

——それまで副手というのはどんな身分というか、人件費は大学から出ていたわけではないんですか。

塚田 手当？ いや、出ていたんです。アルバイトのほうで出していたんだと思います。ただ、その程度にしか考えていなかったんです。だけど学生の読書指導を、各学科に読書室というのがあって学生たちの読書の、本の

相談とか、学科の教授会などのいろいろな雑用とか、そういうことをその人たちはしていたわけですから、ほかの学部から見れば多少ゼイタクに思われたかもしれません。全学科に副手を置くということが認められて、名前も変わっていちおう職員になったというのがその時の経過でした。

そういう問題が片づいたころ、松浦先生が自分はちよつともたないと。実際にさつき言ったように学部長会が終わると、あとハーハーと苦しそうで見かねていたんですが、それで彼が辞めるというので学部長選挙になったわけです。それで私が選ばれたんですが、なぜ私が選ばれたのか私にはよくわからないんです。

——お話とか、事前に何かなかったんですか。

塚田 たぶん松浦さんとかはやっていたかもしれないんですが、私は学部の中ではいつも小さくなっていたから、どうして私が選ばれたのか。周りの人が各学科で運動というか、言っていたかもしれないませんが、私自身はそんなことは全然知りませんでした。

松浦先生の体の具合もあって、教授会の司会などもなかなか大変ですから、学科長が毎回の教授会の司会を交代でやるようになってね。だから私も部長として運営していくこともよくできなかったもので、これはいいと思ってそれを採用して一年間、学科長に回り持ちで教授会の

司会をしていただきました。ただ、一年たってみると、部長として教授会を運営していく上で自分が司会をしたほうが早い、やりやすい。あるいは自分の意向をそこではっきり示すこともできる（笑）。司会自体も一つの政策ですから、一年でやめて、二年目から自分で司会をするようにしました。

でも、私が学部長に選ばれた時、松浦さんのところに古い教授が来て「塚田さんで大丈夫ですか」とか心配したという話もあります。

——それはどういう意図の下で言われたんでしょうね。

塚田 いや、わかりません。でも、ちょうどそのころ私が習った先生たちが上のほうにいましたし、若造だったわけです。だって、ほかに若い人といったら室さんとかいま言ったような人たち。渡辺（一民）さんは一般教育に長くいたからベテランでしたが、私なんかは全く新米。速水先生も、新米ではあったけれど、もうすでにチャブレンでやっていました。ですから私は、下にだけかいたとは思わないけれど、学部教授会の中では若手の若手だったんです。でも、紛争の雰囲気はまだ残っていましたし、学部全体としては落ち着くような状況ではなかったということで私を選んだのだと思います。

これは私にとっては、勉強もできなくなつたし、いろいろな意味で個人的には甚だマイナスと言っているか、

決して喜ばしいことではなかったんです。でも、学部がいろいろな意味で危機的でしたから、結局引き受けざるを得ませんでした。私が学部長になったところもまだ外で部長会を開いたりしていましたから、学校の中は本当に落ち着いていなかった、紛争の名残がまだまだ続いていた。

それから、文学部の中でも研究室の一部が占拠されていて、それをどういうふうにして学生から取り上げるかというふうなことにしても、まだ手がつけられていなかったというふうで非常に不安定な時期でした。ちょうど学部長室の真向かいの部屋を教育学科の学生か何かが占拠して、我々文学部としては説得するか何かで、腕力で追い出して取るというようなことはしなかったの、いま何人入っているとか、泊まりがけで前の状況を静観していたんです。向こうも時々泊まりがけで入っていました。

そして、仮にみんなが部長室に押し寄せてきた時に逃げられるようにと、今はどうなっているか知りませんが、その隣の部屋が部長付というか、秘書の部屋があつて、その次の部屋が文学部研究センターといって、そこで先生たちがお茶を飲んだりお昼を食べたり、何かの会合を開くとか科長会を開くとか、そこをいろいろな形で使っていたのでその間を、三つの部屋を中からつなげ

て、一つのところに来てはほかの部屋へ抜け出せるというふうな形でいわば“戦時体制”を整えていました。

渡辺先生の話にもあるように、我々はいよいよ目の前の学生に占拠された部屋を何とか奪回しなければいけない。いない時に占拠しようと泊まりがけない時を見計らっていたわけ。なかなか難しかったんですが、あれはどっちが先だったかな、我々が見て学生がいけないというのがわかった。鍵がかけられていて、鍵を壊すか何かをしなければ入れないので、それよりも横から入ろうと、いない間に横の壁にドアを付けたんです。隣の部屋から彼らの研究室に、占拠している学生の部屋に入れるようにドアを付けて……。

——それは工事をしてということですか。

塚田 ええ、工事をして、彼らのいない時を見計らって、そこに鍵を付けて、ドアを付けて、その部屋の中のを全部出して、こちらが逆にそこを占拠した。その後、学生のほうも何も起きませんでしたね。そもそもそのころ学生のほうもしほんでいたと思うんです。私が学部長の時にはそんなこともやりました。ですから、動乱の時代でしたね。

——研究室を占拠していた学生たちの主張は何だったんでしょうか。

塚田 主張？ 何ですかね、あまりそこからの放送はな

かったな（笑）。

——そうですね。

塚田 教育学科の学生たちが教育学科のカリキュラムとかが何かについてプロテストしていたように思うんですが、学部としての対応とかそういうものは何も要求されもしなかったし。そこを取られたというのは、本当は教育学科の責任なんです。彼らが何を主張していたのか。ピラとかいろいろなものがあったけれど、ちゃんと読んでないからちよつとわかりません（笑）。

六号館を占拠したのはその前か。

——そうですね、六九年一二月、クリスマスごろだったと。

塚田 クリスマスじゃない、一月二日。

——封鎖解除。

塚田 忘れもしない、一月二日。私もその中にいたんです。

——あつ、そうでしたか。

塚田 その話に戻れば、その日、前の晩、グループで集まることになって、車のある人は車でいうので私もオンボロの車を持っていたから速水先生と待ち合わせて、そしてどこかお寺に。四十七士か何か集まったお寺かな。どこかお寺に集まって、そこを真夜中に出発して。

——お寺って、この辺りのお寺ですか、遠いところでは

か。

塚田 東京タワーに近いところ。

—— 泉岳寺ですか（笑）。

塚田 泉岳寺だったかもしれない。覚えてないんです。そんなことを思い起こさせるような場所でした。あの近くでしたよ。そこに一二時に集まって、車のある人は車で来ていて、それに分乗して六号館に来たんです。私たちは野口〔定男〕先生が分隊長で、六号館の正面にやってきたのかな。僕らはみなヘルメットを渡されて、あとは何もないんです。来たところ、みんな鍵をかけられたりいろいろでしたから、それを壊して入っていったんです。その武勇伝は渡辺先生がお話していますから繰り返すことはないと思いますが。分隊長をしていた野口先生が元気のいい、法学部とか、あと渡辺一民さんとかそういう人に、特攻隊みたいに第一陣で行かせて、我々はもう少し待っている。やっているうちにあんがいおとなしく最後は、教員の顔を見たら向こうも抵抗をやめてね。入ってみたら思っていたより人数が多かったとかいろいろなことがありました。

文学部長をやって、教授会、部長会を一年、外でやりたりして、その時の総長は尾形先生ですよね。

—— 尾形先生は七五年の七月に当選しています。

塚田 大須賀先生。

—— いや、佃〔正晃〕先生。

塚田 佃先生か。じゃ、私は佃先生の時に……。

—— 大須賀先生、佃先生で、七五年の七月から尾形先生です。

塚田 なるほど。

—— ですから、先生が学部長になられて、しばらくしてから尾形先生が総長になられた。最初は佃先生です。

塚田 そう、最初は佃先生が総長でした。それで尾形先生になった。尾形先生は一つの信念みたいなものがあって、それを頑固に貫くようなタイプの人でした。私は彼を尊敬というか、物事をきちんと整理されて、よくやっていらつしやるなと思っていました。そのころ紛争も次第に収まってきて、前の話にも出ていたように思いすが、キリスト教学科の卒業生に神学士を出すのを、選択みたいにして文学士か神学士にしよう。その提案をしたのが私の学部長の時でした。

確かにキリスト教学科の現実から見ると、キリスト教の「キ」の字も知らずに入ってきている学生も結構いたから、キリスト教学科神学士という名前と内容が伴わないような学生も結構いました。それで神学士というより文学士のほうがいいんじゃないか。学生の実態から見るとそういう考え方が提案された。青山学院から立教に來られた野呂〔芳男〕先生がそういう主張をされていました。

が、たぶん青山学院がそういうことになったんでしょか。よくわかりませんが。あなたは青山出身でしょう。

——はい。ある意味、逆ですよ。キリスト教学科から神学科に名前を変えましたから。だから、より神学校的性格が強くなったんです。ただ、その後、何が神学校なのかということをめぐるって当時の学院当局と考え方がだんだん合わなくなってきた。それが遠因なんですけど。

塚田 僕らはその時に青山から立教に何人か引つ張ってきたわけですね。

——はい。

塚田 野呂さんが神学士と文学士のどちらでもいいような形でやったらどうかということを科長会で諮って、皆さんも賛成して、提案したんですが、尾形先生は断固反対でね。この大学はキリスト教大学で、そのキリスト教学科を卒業しながら文学士とは何事かというわけで簡単に一蹴されてね。部長会でも一、二回議論しています。彼は頑固にそういうふうに主張されて、その件は出しても無理だということで学科のほうも収まった。

あと、私が学部長の時に何をしましたかね。あまり覚えていませんね。

——今のお話で、これは根拠のある話ではなくて想像ですが、それまでの青山はキリスト教学科だった。それを結構苦労して神学科に変えた。そうすると、たぶん青山

のキリスト教学科とか神学科にいた人間は、キリスト教とか神学という名前の違いにかなり敏感だったと思うんです。そうすると、キリスト教学科なのに神学士を名乗るのはいかげなものとか、しかも実態としておそろくどんどん、いま塚田先生がおっしゃったように世俗化が進んでいる。それで神学士に違和感を感じるようになったのではないか。これは何となくの想像ですが。

塚田 確かに学科のほうもカリキュラムなどを広くして、キリスト教徒でもない人たちに神学を教えるのは実際無理な話なので、もう少し一般的なレベルでのキリスト教文化みたいなものを取得できるようにしたり、いろいろしました。そういう意味で文学系の、文学部卒という形、内容的にはそういう科目で卒業できるようなカリキュラムをつくったり、クリスチャンでない学生たちにはそういう科目を取るように薦めたわけではないけれど、取れるようにしたわけです。

——それは紛争後のキリスト教学科のカリキュラムの改革ということですね。

塚田 そうそう。文学部の中でのキリスト教学科ということ了我々は非常に意識して、神学部ではないんだ、キリスト教だということをやや広く、科目の中にキリスト教美学とかそのようなものも正課にありましたし、もう少し広くキリスト教文化を学べるようなカリキュラム



に変えていきました。これがいわば現実です。むしろ神学は大学院に入ってからやっていくほうが順番としていいし、また学生の現実から見てもそのほうがふさわしいのではないか。これが我々の、そのころの学科のコンセンサスだったと思います。

——どうなんですか、キリスト教学科としてはこの紛争の後で次第にそういうふうに変わっていく。例えば人事でも新たに教員を採る場合、たいていの場合はキリスト教に関係する学問分野の人事ですが、聖公会系統の人を採るというより、それ以外のところから採るとか、そのような傾向が強くなったんでしょうか。

塚田 そうです。ですから、青山からも採ったし、聖公会でない人とかも、もちろんすでに中沢〔治樹・聖書学〕先生という無教会の先生もおられました。その前からキリスト教学科の先生の中には聖公会以外の人もおられましたから、聖公会の神学でもないし、神学と言うにはちょっとおこがましいような内容で、我々教員としても神学……。神学も教えましたが、全体から見れば、キリスト教文化という言い方のほうがふさわしかったと思います。学生も選択の幅が広くなりましたから、そういうふうな学科の変化もあったわけです。

しかし、尾形先生は原理原則に立って議論する先生でしたから、今のような考え方に對して真つ向から反対

で、最初から相手にしないみたいな議論でした。だから私はその時、学部長でしたが、これではとてもだめだと思つて学部の方も、学科のほうもあきらめたという経緯があります。あの時、科長だったかな、野呂先生はその主張の、その方向で一生懸命カリキュラムとかいろいろなものを考えておられたように思います。

ほかに質問がありますか。そのころの思い出は……。

### クリスチャン・コード

——時間の関係でそろそろ次回に回さざるを得ないのかなという気はしていますが、いくつか……。

これはキリスト教学科というか、文学部だけのお話ではありませんが、紛争後に総長の資格について、それまでは聖公会信徒ということが寄附行為の中に明示されていましたが、これが外されるという話がありました。その辺りについて何か覚えておられることはありますか。

塚田 はっきりしたことは記憶していませんが、そういう意見が大須賀先生の時とか佃先生が総長になった時とか、そういう時に出てくるようになっていましたし、一方で、全学的に総長の資格に對して疑問を呈するような人たちも出てきました。私はその案に基本的に賛成しました。現実に総長にふさわしいと思われる人が必ずしもいつも得られるわけでもないし、また聖公会信徒と



いう人も実際に数の上からいつて少なくなってきた。そういうことから見れば聖公会信徒というのは外したほうが現実には即していると思っていました。

それから、聖公会信徒でなければだめだというような形で大学の運営はもはやできなくなってきた。かつてのような、一時代前のキリスト教大学としての位置づけは現実にはなかなか難しいということは私も思っていました。それで大須賀先生が選ばれた時からもうちょっと限界だなと。むしろそれよりも、いちばん大事なことはキリスト教の、建学の精神が何かにうたっているわけで、それに賛同することは本当に考えれば決して簡単なことではないので。

尾形先生はそれを非常に気にされて、キリスト教徒の枠を外されても総長としてはキリスト教大学であるというのを極めて忠実に、また現実にはそれを受け止めていくというような姿勢をお持ちでした。私は、それはすばらしいことだったと思っています。ちょうどそのころ中学校の校長をしていた西村（哲郎・司祭）先生が、彼は中学校長、兼、院長をしていたのかな。尾形先生は西村先生を非常に尊敬して、西村先生に絶えずいろいろな意見を求めていたり、何かしていたようです。私は西村先生をよく知っていて、その様子も伺っていますが、尾形先生はそういう意味では非常に真面目に、キリスト教徒

でなければいけないというのが外された、その最初の総長だということを強く意識されて、今までの総長以上にそのことを意識して、その面で立教大学はもつとキリスト教的な学校にならなければいけないという考え方をもちでした。それは、私は高く評価したいと思います。彼はとにかく西村先生を、両方とも嘗て海軍士官でもあって、それも大きいんですけど、非常に尊敬していました。

でも私は現実を見て、もし聖公会信徒という枠が外されたら、率直に言えば、たぶん佃先生が総長になることもなかったんじゃないかといった気持ちもありました。だから私はその時は、やはり総長にふさわしい人を、全学を見ながら選んだらいいという気持ちで受け止めていました。しかし、尾形先生はそのことを非常に意識されておられました。実際にその後の総長たちを見ても、キリスト教徒でなくてもその点はなかなか無視できないですね。ここのチャペル活動にしてもいろいろなことについて、支援するような姿勢を各先生は持ってきたのではないかな。大橋先生が総長になった時もその辺のことをいろいろ心配しておられた人もいますが、彼はそれなりにその点には注意を払っていたように思われます。名を取るよりも実を取るという側面から私はこれに賛成しました。クリスチャンの先生たちの間でも、これを大きな

問題として議論するということはあるかなかったですね。もう実感として、現実としてそういう状況に入っていたと思います。

——寄附行為改正については教授会で議論とかあったんですか。

塚田 いや、していません。

——そういうことはしていませんか？

塚田 はい。総長選挙とかそういう時に多少その問題が出ていますから、その報告とかいろいろなことはあったと思いますが、それをめぐって、こうすべきだ、ああすべきだというふうな議論はあまりなかったように思います。私も委員をしていたと思うんですが、そういう記憶はあまりないですね。

——伊達さんに伺った時も、比較的すんなり決まっちゃったと伺ったものですか。

——今日の先生のお話を伺って、もうそろそろ限界に来ているというところだったのかなという気はしました。

塚田 聖公会の信徒も少なくなってきたし、クリスチャンの先生たちの間ではそんなふうでした。でも、尾形先生はその点では非常に立派で、そのことについては非常に強く意識して、クリスチャンの先生以上によく認識しておられて、真剣に受け止めようとされています。

——私などが数十年たってから、だいぶたってからこの当時の彼の言葉、文章などを読んでいると、逆に気負いすぎているぐらいかなという気がするぐらいです。

塚田 彼は無教会のグループに入っていた人ですから、全くキリスト教に縁がないというようなことではないんです。

——そもそもヨーロッパ政治思想史の先生ですから、そういう意味ではキリスト教思想にも学識がおりになったと思います。

塚田 尾形先生は物事をきちんと押さえてやっていくという意味では立派な総長だったと思います。頑固なところもいろいろありましたけれど（笑）。

——私はそのころ文学部長でしたが若かったし、立教に来て九年もたっていたとはいえ先輩の先生たちもたくさんいて、教授会になっても三分の一ぐらいは私が習ったころの先生だったんです。飯島淳秀先生もおられたのではないかと思います。

——あつ、まだいらつしやいましたか。

塚田 そうです。それからさっきの細入先生とかは僕がみんな習った先生だから。秋山（徹夫・英文学）先生とか古い先生がみんな上にいて、小さくなっていました。

——紛争後の文学部の改革の話ですと、いちばん大きいのはカリキュラム改革。それから先ほど先生がおつ

しゃった集中合同講義のような学科の壁を取り払うような動き。あと、文学部の研究センターというのもそういう意図でつくられたんですか。

塚田 そうです。それも私の時に発案して、そういうふうにしたんです。文学部研究センターのセンター長にもそういう役割を担っていただく。学部内の交流を促進していくというような考え方で、あそこをそういう場所に位置づけてね。紛争の後、学生から部屋を取り戻した時に、いい機会だったものですから、そういうふうに変えてしまったんです。闇に乗じて、混乱に乗じて、単に考え方だけではなくてフィジカルにもいろいろ変えまして。非常事態でしたから、そういうこともできたんだと思います。今から考えれば、ずいぶん学部を乱暴に変えたなという気はしますけど。

——長老の先生方もそれには特に抵抗はお見えにならずに。

塚田 もう気力がなかったんじゃないですか（笑）。

——最初の大衆団交のところで、当時、細入学部長だったんですが、その後すぐ辞めてしまったから、この時点でもう投げてしまっているわけですね。

塚田 そうそう。若い人たちに「あと、付いていきます」なんてぬけぬけと言うような先生たちだから、あの世代は矢面に立とうなんてだれも思っていないの。結局

我々の世代が紛争後の文学部を背負っていくという雰囲気がある時にできてしまったんです。それに対して古い考え方を持っておられる先生たちは辞めていきました。新しい考え方とか、耐えがたいと思つたんでしょう。それはわからないですけど。

——ところで先生、この間、図書館の職員の話をしているらしやいましたが、これが名簿です。番匠谷館長以下、図書館の天野さん。天野さんはずいぶん長く働いておられます。

塚田 天野さんだ。

——先生がこの間おっしゃっていたのは天野さんですか。

塚田 ええ。確かに天野さんでしたね。

——図書館でもいちばん長く勤められた一人ではないかと思います。終戦直後に面接を受けて来て「じゃ、今日から働くか」と言ったら、「今日はお弁当を持っていなから明日からにします」と言つたという有名な話。つまり、外食ができない時代だったんです。つい去年だったか、亡くなりました。

塚田 そのころ立教の図書館にいて、夜、早稲田かどこかの夜学に行っていた。

——そうだったんですか。

塚田 だから、半分学生でもあった。彼が図書館に遅くまでいましたから。

——天野さん、名物男でしたもの。私が学生のころも閲覧課長でした。

塚田 そのころ天野さんがいて、我々も親しくいろいろな話もしたりして。夕方になると学生は最後、私一人ぐらいたったから。天野さん、思い出しました、そうです。懐かしい、この上ね。いまチャペルの代わりになっている。

——そうです、いま仮礼拝堂になっています。

塚田 昔の面影はないけれど。この後はどうなるんですか。

——展示館になります。立教の歴史とかそういうことを展示するのに二階のワンフロアを使って、下はまだ我々が使っていますけど、どうなるかわからないですね。

ではこのへんで。長時間、ありがとうございました。

(二〇一三年五月三〇日収録)

#### 第四回 インタビュー

##### 総長としての改革

——前回は紛争後のカリキュラム改革の辺りをお聞きしました。その後、八〇年代で総長室長になられますが、

時間の関係でその辺りは飛ばしまして、いきなり総長になられた辺りからお話を伺いたいと思います。九四年に総長になられました、どういう経緯で就任されたのでしょうか。

塚田 私はその前、文学部長をしていました。私は文学部長の時に英語教育の充実を図るべきだと、語学教育の充実を言っていたものですから、どのようにしたら全学の語学教育を充実することができるということをいろいろ考え、案をつくって部長会で提案したんです。文学部と一般教育部の先生、具体的には実松克義先生、阿部珠理先生、渡辺信二先生、高橋輝暁先生が、正月休みも返上して頑張ってくれました。ところが、あの時は濱田〔陽太郎〕総長でしたが、うんとも言わないし、学部長の皆さんも顔を見合わせるだけですね。一般教育部長は、これはいい案だと言ってくれたんですが、結局その案は通りそうもない。語学教育充実を目指している教員と私たちはかなり勉強会もやったりしていました、どうも通らない。総長も動かないし、これじゃだめだと。それで仲間が、それじゃ、総長になるしかない（笑）。総長になって頑張ってくれという話になったんです。私は総長なんて考えていなかったし、私の性格からいっても合わないから、いやだと言っていたんですが、今まで語学教育の充実というように一緒にやってきた手前、

どうしてもいやだとも言えなくなつて、私は運動しないけれど、あなた方が私にやらせたいと思うならば、あなた方の、私が総長になるための運動は黙認する、ということだったんです。

それで六月でしたか、五月ぐらいから総長選挙のいろいろな手続きが始まったんです。私を総長にするということで、候補の中に入れて、この人たちは各学部の人たちに働きかけてだいたい運動したようです。私は一切知りません、関係なし。なりたいたいわけじゃないんだから勝手にやれと言つて。そうしたら総長に選ばれたわけです。もちろん、一つの目標は語学教育の充実。私が総長になつたら、それを使命として受け止めていく。それから、前から問題になっていましたが、財政ですね。立教大学の財政が濱田さんの時からあまり芳しくないの何とか立て直さなければいけない。これがもう一つの重要な課題でした。私としてはその二点を、私の総長としての四年の間に何とかめどをつけたいと思っていました。私が総長に選ばれて就任して、その夏休みに会計の課長さんたちを呼んでいろいろ話を聞いて、その夏休みの間に財政白書をつくったんです。材料はそういう人たちから集めました、書いたのは私、自分自身です。今までの経験から見ると、全学に総長の基本的な考え方を知ってもらうための集まりをやっても人はあんまり集ま

らないし、文書で出すしかない。それがいちばん手つとり早いのではないかというので、財政白書を書いて全学の教職員に配ったわけです。

財政白書を書いてから、新しい年度に向けて予算などの検討で、どのように財政を立て直していくか、また財政の基盤をつくり上げていくかということを、いろいろ考えました。私はたしか三月の終わりに、あなた方の手元に取つてあるかどうか知りませんが、総長文書を全教職員に配ったんです。この半年の間にこういうことをやるうとしているか、どういう課題があるかというのを書いて皆さんに配りました。さらに四月には、一年間の大学としての課題というものを提示して皆さんの理解を深めてもらう。今も続いているそうですが、総長文書を四月に出して全学に……。

——一九九四年五月に就任されていますから、それは一九九五年四月ということですね。

塚田 そうです。その前の経済白書も全部回していますし、九四年の夏、秋に一度回して、それから暮れに、三月に一年間の経過報告を書いて、それから四月にその年度の課題を書いて全員に配ったわけです。そういうのはとってありますか。わからない？

それを見れば、何を考えていたか、何をやるうとしていたかというのはよくわかると思います。年間の課題を

そこで書いて、私はそれをほぼやっていったと思います。

過去を振り返ってみると毎年、年度の終わりぐらゐに、二月から三月の間に、年間の会計の締めと来年度の予算を部長会でちょよちょよやっていたのですが、これでは全学の人たちに理解してもらえない。そういうものも全教職員にきちんと理解してもらう必要があるのではないかとということで、私は先ほど言った財政白書も出しましたし、総長文書の中でもその年度の課題を書いて、同時に、これまで年度ごとに議論していた予算会議というのを、五年間の予算をつくり、その中で今年度は何をするかということを提案しました。

ですから、全体として五年の間にこういうことが必要で、それにどれだけの費用がかかるか。毎年の予算の中でどの程度出せるかということ計算しながら、今年度はこういうことを実現していきますとか……。その中には教室や何かの冷房とか地震とか何かの補修とかそのようなものを書いて、皆さんにお渡ししていたと思います。それから、その年度から全学の語学教育の検討会というか、そういうものも……。あつ、その前からすでに部長会で提案して、少し始めていたんですね。それをもっと徹底してやっていこうということで、委員会をつくったのかな、どうでしたかね。もしわかるようであれば

私の総長文書を、年度の初めと終わりに出しているの  
で、それを見せていただければ、何をやって、何をやる  
うとしていたのかということがかなりはつきりわかると  
思います。財政の立て直しということでも、予算を五年  
計画の中でどのようにやっていくか。その時々のことでは  
なく、計画性をもった財政計画というものをつくって  
やっていこうということを始めました。

語学教育についても、全学の語学教育の充実を図るた  
めの委員会をつくりました。それでだいぶあちこちから  
批判を受けたり何かしましたが、頑張りました。ですから、  
今の全カリとか語学教育などはみんな、私の時にその  
小さなグループから始めたものの結果なんです。その  
辺りは皆さん、知らないでしょうが。

そういうことを充実するためには教員を増加しなければ  
だめだ。今の程度ではとても、非常勤とかそんな程度  
ではだめだと。私は五年間のあれ、何と言うんですか、  
語学教育の……。

——嘱託講師（現教育講師）です。

塚田 それをつくろうと提案したんですが、これで組合  
の連中にさんざんいじめられて、とうとう都庁に訴えら  
れてね。労働の仲裁みたいな、裁定をしてもらおうと  
いつて訴えられたわけです。私たちは夜八時か九時ごろ  
から行って、都庁の、我々はこの一室、組合はこの一室



と、両方が顔を合わせないで別々の部屋に入る。都庁の人がこっちの話を聞いて、それを持って向こうへ行く。その話を聞いて、答えをまたこっちに持つてくる。まあ、手間のかかることを。向こうで何をやっているかわからない。こちらはただ待つていだけ。そういうのを何回かやりました。そんなことでずいぶん無駄な時間を、しかも夜遅くまで使いましたが、結果的には押し通したわけです。それで今の語学の講師を五年のあれで雇って、その人たちには別に給料を安くしたわけじゃなくて、しかるべく払って、もっぱら語学教育のほうを徹底的に教えてもらおうということで始めました。

それから全カリのほうも、この間ちよつと出ていまして、今までは一般教育部に任せていました。でも、こういうことを言つては申し訳ないけれど、一般教育部の先生たちはやはり専門的なことを教えたいわけです。しかし一般教育というか、学年の浅い人たちに教えるのはそんなに易しいことではない。しかもそれを若い、経験のあまりない人たちに委ねているやり方について私は前から疑問を持つていたんです。そうではなく、本当はベテランの先生たちが一般教育をやるのがいちばんいい。そのためには、一般教育部の先生だけに語学とか全カリを任せるのではなく、むしろ全学部で先生がそれを分担するという形でやるのがいいんじゃないかというので、

それを提案したんですが、これもすつたもんだ、いろいろしました。でも、これも押し通したわけです。

他方、財政のほうも決して楽ではない。さつき言ったように計画性をもつて学内のいろいろな補修、あるいは冷房化を徐々に進めていく。同時に、いま中高が向こう側に移りましたが……。

——道の向こうに。

### キャンパス問題

塚田 元は、四号館の向かい側のほうにあつたわけです。そこを取り壊して、大学がそれを使うようにしたい。その代わり中高のほうは大学が使っている運動場を、部分的に引き揚げて、あちらに新しい校舎をつくる。新しい校舎をつくりたい。大学と隣接していた、前の建物（一二号館）はもうひどい、戦前の建物で、雨漏りもしたりいろいろあつて前から問題になっていたんです。中学校の校長先生が総長にそれを訴えておられました。私も中高の校長に会つたら「ここはひどいので何とかならないでしょうか。そういう話を大学の学長に話しても、うんうんと言うだけで何もしてもらえなかった」と言われましてね。

——今のお話は先生が総長になられる前の話ですよ。塚田 前からそういう話があつて、私がその話を聞いた



のは前に総長室長をしていたことです。そういうことも頭にあったから、中学校は向こうへ行って全面的に新しい建物を建て、その代わりこちらの土地を大学がもらって、そこに研究室を建てる。中学校には、いくらでしたか、一〇億以上か何か、建築費用の一部として土地代を……。考えたら安かったんですが、それを向こうに出して、その土地を大学が使うという提案をしたんです。

これは中学校のほうも半信半疑で、そんなことできるんですか、という話でしたし、大学のほうは大学のほうで、いい話だと。誰も大学が金を出すことに……。何もないところで大学が金を出すと云うところさいますねですが、その土地を利用できるということで誰も文句を言わなかったんです。法学部長は非常に喜んで「この案はどなたの案ですか」と言うから、「私です」と言ったら、「ああ」と言ってそれっきり（笑）。みんな信じられないと思っていたんですが、うまくいったんです。

中学校はまた建て替えたか何かやっているんですか。向こう側の建物はそのままです。

——建て増しをしたんです。

塚田 あの時体育の先生にだいたい、何回も何回も面会を申し込まれては文句を言われました。体育はあちらのグラウンドを使っていましたし。

——新学院グラウンドですね。

塚田 そうそう。だから、できない、そんなの困ると、いろいろ言われたんですが、新座にそういう場所もちゃんとあるし、部分的には中学校のほうのグラウンドも、残っている部分ですけど、その一部を貸してもらいうことで中高とも話をつけてね。体育科の先生に何回も面会を申し込まれてはそのことを言われたんですが、結局押し切って。とにかく新座には立派な体育館ができ、グラウンドもあるんだから、そっちを使ってもらってはどうかと。

同時に、あちらのキャンパスには土地が十分にあるんだけど、お金の出場所がないから、あちらに学部の一部をつくる。そこに学生を収容して、大学の経費も一部、ある程度そこで生まれるのではないか。そういうことで観光学部とコミュニティ福祉学部をつくることにしたわけです。あちらに学部をつくれれば向こうのキャンパスも生きる。確かに離れていて具合の悪いことはあるけれど、せつかくある空き地を、こちらはいろいろ困っているわけだから、そこを利用する。ただ利用するだけでは赤字になるばかりだから、そこに学部をつくれば多少でも収入の助けになるんじゃないかということはこの案をつくったんです。そのおかげで私のいる間に財政は次第によくなってきましたから、これもある程度達成することができたわけです。

そのほかに何をやりましたかね。毎年の白書とか、年度の計画について全学の教職員に配った文書を見れば、何があったかはそこに全部書いてありますので、ご覧ください。記憶してなくて、すみません。

私が総長の時に高橋〔輝暁〕先生が総長室長をしていましたが、彼も立教に来てわずか四年で総長室長にされたので、なんだ、若いのを使って塚田は勝手なことをやっているって悪口を言う先生もいたようです。でも、彼はなかなか働き者だね。

——ドイツ文学の高橋先生ですね。

塚田 総長室長が助けてくれなければ、総長一人では何もできないですから。彼は人柄もよくて、みんなと衝突することなく、いろいろなことをよくやってくださいました。だから彼には感謝しなければいけない。あるいは私をかつぎ出したいろいろな人たちが陰で、それぞれの学部の中で私の方針を実現するために努力してくださいました。決して私一人の力ではできなかったと思います。私は就任して四年間の任期が終わる時には、もう私が課題にしているようなことは一通り済んだ、これで終わりというわけで辞めるつもりだったんです。

あのころは五月か六月に選挙だったかな。私の家内はご存じのようにスイス人でしたし、前から退職したらスイスに行くこと約束していたので、運送なんかも頼んで荷

物を出し、早々に引き揚げるということで引越しも……。私は総長の時は目白のほうの借家に住んでいて、総長の手当はそれでみな、お金は使っていたから、何も残らなかったんですけど。そっちの契約も六月で終わりということにして、辞めるつもりでいたので全部手続きをしてしまった。ところが、前に私を総長にかつぎ出した連中が、もう一期やれって言う。そんなのは勘弁してくれと言ったんですが、聞かない。しょうがないから、それじゃご自由にと言って。でも私は辞めるつもりで全部支度していた。

私が総長であることに反対の人たちもだいぶいました。特に職員の中にいましたから。私はそういう人たちの動きはだいたい把握していましたから、いろいろ報告は聞いたんですが、結構だ、私は落ちるのは一向に構わないって。私は辞めるつもりで全部準備していたから。で、結果的に二回目時には落選したわけです。これは皆さん、ちよつと驚いたんではないかと思う。今と違って、だいぶいまは変わったようですが、あの時はタッカー・ホールに集まって最後の投票をして、結果はそこで出したんです。で、私じゃなくて、経済学部の大橋〔英五〕先生が当選したというので、みなシーンとしてね。そばにいた総長室長がね、「塚田先生、シーンとしていますね」ってちよつとびっくりしたような雰囲気で

したが、私は心の中では喜んでいたんです。帰るつもりで全部支度して、荷物もみんな送り出したところでした……。

私は総長の二年目ぐらいでしたか、院長にさせられたんですよ。院長になったのは、その前に院長をしていた八代崇先生、彼が病気などもあって辞めたいということだったんです。それが理事長のところに出て、理事会の時に理事長が「実は八代先生から院長を辞めたいという辞任の申し出がありました。については塚田先生、後をやってください」と言われたのでびっくりしてね。そんな話、何もなかったし、そんなこと、考えてもいなかったから驚いて、「え？私がやるんですか」と言ったら、みんなうなずいている。そこで断りきれなくなつて引き受けたんです。そうしたらそれが祟つて、総長を辞めて帰ろうとして全部支度したところで理事長が、その時の理事長はこの間亡くなった小宮山「昭一」さんに代わっていたんですが、小宮山さんに呼ばれて「塚田先生、あなた、まだ任期がありますよ」つて。

——院長の。

塚田 うん、院長の任期がありますよ。スイスに行くことはわかりならんと言うんだ。参っちゃってね。家内も喜んでいるし、スイスに行く支度も整ってしまったし、荷物も出すことにしているし、何とか勘弁してくれと

言っただけで、いや、だめだと言う。あとの任期があるんだから、ちゃんとやっていつてもらわなければ困るつて。しょうがなくて結局、総長を辞めたものの、日本から離れられなくなつてしまつて、それで院長を続けなければいけません。

### 一貫教育問題

塚田 総長兼院長をしているところに、私は先ほどお話ししたように、全学カリキュラムとか学部部の語学教育とか、いちおう考えていることを実現したんですが、今度の大きな課題は以前から問題になっている小中高大の教育の連携です。これを何とかしなければいけない。私としては、もし院長を続けるとすれば、それを実現したい、すべきじゃないかと思つていたので、今度は、院長を継続しろということですから、これが私の使命かなということで、そこで、たしか委員会をつくつて、各学校の代表者というか委員と何回も、二、三週間か、月に一回ということではないな、もう少し頻繁に委員会を開いてこの問題について検討し始めたんです。

これもなかなか厄介でした。新座に中高ができ、池袋と二つになった。ですから、一つの大きい問題は小学校の卒業生をどうするか。みんな池袋の中高に行きたいというわけだ。それでまた小学校の教員会にだいぶ呼ばれ

ていろいろ言われました。校長の田中〔司〕先生に、あれはいつかな、私が院長の時に彼を校長に頼んだんですが、その彼に、こういうことで協力してくれと。そういうことで彼も私もだいぶ小学校の先生たちに……。結構厳しいことを言う人がいて、簡単ではなかったんです。父兄も、自分の子どもは池袋の中高に行かせたいというようなことがあって、厄介だったんです。田中先生もいろいろ努力されましたし、私も小学校の教員会、父兄会に行っているいろいろお話をしました。結局、最初に希望を取って、どうしても池袋は希望者が多いので、その人たちはくじ引きで振り分ける。ですから、人によつては泣く泣く新座のほうに行った人たちもいるわけです。

それと同時に、皆さんが新座に行きたくないということの中には、学校の性格とか学力問題とかいろいろな問題があるから。私が総長の時、校長が交代することになって松平〔信久〕先生に校長をお願いしたんです。松平先生は文学部教育学科の先生ですが、彼は卒業生でもあるから、あなた、校長をやってくれと言いました。校長になつてもらいました。私もその後、何回か院長としていろいろな教員会議に出ましたけれど、まあ勝手なことを言うわ言うわ。突き上げるのが二、三人いるんです。あの様子にはちょっと驚きました。でも、校長はなかなか芯の強い人で、いろいろ言われてもそれを受け止め

て、勇ましく激論をやるというわけではなく説得している形ですね。

新座のほうにも、レベルとか学校の性格などについて、よくしなければ小学校から新座のほうに行きたいというのが……。行きたくないという理由は、ただ距離だけの問題じゃなくて、学校の性格もあるからということでは何とか努力していただきたい。新座の高校の先生と〔池袋の〕中学の先生とが入れ代わったりいろいろして、あるいは交代で代わったりして中高一貫教育をもっと徹底させていく。それから、レベルを上げていく。

同時に、そこではカリキュラムというものが重要です。今までは障壁みたいなものをつくって、大学が自分たちの系列の高校から入学してくる生徒に試験をして合否を決めるというやり方自体に非常に問題がある。基本的に全員を入れる。確かに学力が不足している人がいるわけだから、その点では振り分けが必要だけど、基本的に全員を入れる。それぞれの学校から、下から推薦されている者を信頼して受け入れる。中高で受け入れ、中高校から大学へ来る時にもそういう制度を……。

一貫連携教育を実現していく上で、不信感みたいなものを相互に持っている中で、それをできるだけ払拭して生徒たちを受け入れていく。そういう体制を整えることが連携教育の一つの重要な目標というか、本来のあるべ

き姿ではないだろうか。それらの学校の教員とか校長などにもしばしばお会いして、そういう話をしてきたわけです。

学校のほうもいろいろ工夫して、卒業論文を課すとかいろいろなことをされて、高校の教育レベルを少しでも上げて大学に出す、大学で勉強できるような、大学に入って勉強するだけの力を育ててもらおう。それから、高校の中にも優秀な学生がいれば、大学の先生がそういう人たちを教えるということもあるんじゃないか。だから、相互に先生も交流し、また学生も自分の学校、高校生でも大学の先生のところでも多少の教育を受ける。壁をつくるのではなく、もう少し壁を取ってお互いに協力していくという教育体制をつくるのが大事だと。そういうことで何回か教員たちとお話をしたり、また校長とも話をしたり、あるいは父兄に話をしたり、いろいろさせていただきました。

これは一貫連携教育ということで次第に形が整っていききました。今はどういう形で進んでいるのか、うまくいっているのかどうか私はよくわかりませんが、そんな理想というか、理念を抱いて私なりに努力したと言えるのではないかと思っています。

——一貫連携教育の話ですが、先ほど中学校の校舎を道の向こう側に持っていて、道の手前側、タッカー・

ホール側のほうは大学が使う。それと、池袋の中学校に高校をつくって中高六年にする。新座の高校に中学をつくって中高六年にする。こういうのが連動していたと思います。あの時は、それよりもだいぶ前から一貫教育検討プロジェクトということでいろいろなレベルで、僕は事務局だったんですが、現場レベルで言うとか各校の教務部長、教務主任、教頭レベルが出てきていろいろ話し合いをしていました。校長レベルはちょっと上のレベルとして教学常務委員会でしたか、ここで院長先生を座長に、たしか各校の、小中高の校長先生と、あと部長会選出の理事、当時は門奈〔直樹・マスコミ論〕先生でしたか、その辺が出て、たぶん上のほうのレベルでは議論しておられた。たしか当時、池袋の校長が横内〔允〕先生だったと思います。

塚田 そうです。

——僕らはその下のレベルで、教学企画委員会という名前前で各校の教務主任のレベルでもうちょっと具体的な検討をそれぞれにしていたんです。僕らとしては具体的ないろいろな形で、中学校から高校、高校から大学への推薦をうまくすんなりしていくために各校の教育改革をどうしようという議論をしていたんです。そうしたらその途中で、教学常務委員会レベルで、たしか院長先生たちのレベルで、「新座と池袋で中高六年」という方針が院

長と理事長連名でバンと出たんです。

塚田 そうでしたっけ。

——そうなんです。僕ら下のレベルで議論している時にも、そういう話もちろんあったんです。たしか当時、学院の経理課長をしていた辻と私で塚田先生とお話を、一貫教育のことでは何度もご相談に伺って、それで総長であられた時も院長になられた時もご相談しながらやっていて、「池袋・新座」どっちにも中高という話もありますかね」という話もしていましたが、企画委員会としては各校、従来のままで推薦関係をどうするかという話をしていたんです。そうしたところ教学常務委員会レベルで「それぞれ中高」というふうに決まって、びっくりした覚えがあるんです。

池袋の中学校はもうだいぶ前から、自前の高校を持きたいというお気持ちがあったと思うんです。その辺は教学常務委員会のレベルで、例えば先生とか横内校長、それと当時、新座は横校長だったと思うんです。小学校が田中校長でしたかね。その辺でどういうふうにウルトラCで中高それぞれ六年というのが決まったのか。合議ではなく、それは院長先生と小宮山理事長でこう行こうと決めてしまったということですか。

塚田 いや、もちろん校長とも話をしました。それから、高校をつくるとか、中学をつくるというのはそんな

に簡単じゃなくて、いろいろ連盟があるんです。向こうは埼玉県の学校の何かの会がある。東京は東京で池袋地域のがある。

——私立中学校の連盟がある。

塚田 私立学校関係の人たちの間で、つくることがいいとか悪いとか結構言うんです。当初の案としては、向このほうは女子の……。

——新座は共学にしたがっていましたね。

塚田 共学にするほうがレベルも上がるんですよね。そういうことで、案としては共学にしてはどうかという案があったんです。ところが、埼玉県在校長会か何かの席で、私もそれに何回か出たこともありますし、その下準備というか下工作で会長さんなんかに、校長と一緒に行ってその人たちと話し合いました。女子校は困ると。埼玉県には女子校はたくさんあるし、立教が女子を入れれば立教に取られてしまう。ほかの学校は、女子の生徒を入れるというその案を出せば、皆さん、反対すると言われてね。いろいろ考えた揚げ句、解決策は……。

こっちからも、中学なしで高校といっても、こっちの中学から向こうへ行きたくないという今のお話は全くそのとおりでもあったし、この際、中高を両方にそれぞれつくって、一貫にして六年制の学校として考えていくと



いうことでしょうか。そこで何か関門をつくって入学試験とかいろいろなことをやるよりも、一貫した教育をするほうが教育レベルのほうでも有効ではないか。私も校長といういろいろ話をした結果、その案が最終的にどうかと。忘れていましたが、確かにあなたはその事務局を担当していて、急だったかもしれないけれど、今のような経緯があったわけです。それぞれ下から上がってくる人たちを引き取り、その人たちが中学、高校、大学とつながっていくのができるだけスムーズに、それぞれ協力しながらやっていく。こういう体制を整えるためには両方に中高をつくっていくのがいいのではないか。何度も議論した結果、そういうことになったんです。

池袋地区あるいは新座地区でも男子校であればいいですという話でしたから、そちらのほうも話をつけて、それでつくろうということにしたわけです。その場合に先生たちをどのようにするか。先生の人数はできるだけ増やさないと、今と同じ教員体制で中高の両方を持つてもらう。ですから、採用というか、学生の人数をそれぞれが少しずつ減らして中高一貫ということを試みたわけですね。

——共学化、特に新座の共学化に対して埼玉県の私立高校の連盟が反対したということでしたが、それ以前に、学院サイドとして共学化に対してはどうお考えだったん

でしょうか。

塚田 学院のほうはそんなに、いい、悪いという意見はなかったんです。でも、私はやや独裁的だったかもしれない(笑)。

——とおっしゃいますと、反対ということ。

塚田 いやいや、反対なんかあんまりなかったですよ。だって、あの中には中高の先生がいるんだから。みんなに必ずしも諮らずに行つたという意味で独裁だけども、ちゃんと理事長には話をし、両方の中学、高校の校長とも話をつけて、それぞれの学校の教員会議にも私は話をしに行つて。

——中高六年化の話ですね。

塚田 両方の学校に理解してもらおう。同時に、さっきお話ししたように小学校のほうも、ただ、池袋がいい、新座がいいといった漠然とした理由というか、確かに池袋のほうでは新座の高校の評判が必ずしもよくなかったのでも、そういうことをできるだけ払拭して両方で快く受け入れてもらう体制を……。

ですから最初、小学校の校長はいろいろ苦労されました。父兄だけではなく、まず教員たちが大変不満でしたから。そのために私は何回も教員会議に行つて彼らと話をしたわけです。ですから、簡単ではなかったけれど、何とか最終的にその方向を皆さんに納得していただい



た。また、校長がその線に沿って協力してくださったと思います。

——院長として各校の調整とかされていましたが、立教学院の院長という役職は位置づけとしてどうでしょう、十分なものでしたか。よくわからない質問かもしれませんが、位置づけとしては結構難しいところがあつたのではないかと思います、それはあまり……。

塚田 院長は、これまでは言ってみれば雲の上の人だった。だから、学校のことについてああだこうだと言う人はいなかったと思います。松下さんがどうだったか知りませんが、私はさっき言ったように大学のカリキュラム改革をやってきているし、新座の高校からの受け入れについては、両者の関係、高校と大学の関係などもよく知っていましたから、私は院長になった時、この問題を何とかしなければいけないということは最初から考えていました。

——あと、総長として財政上の問題にも最初からかなりいろいろなことに取り組まれていました。客観的にパッと見て、立教学院の一つの特徴としては各校が独立採算制になっているということがあります、これはやりやすかったですか、やりにくかったですか。

塚田 それはやりにくいですよ。それぞれが独立したような形でやっていくことについて、場合によっては障壁

になって学校間の交流とかいろいろな問題でなかなかうまくいかなかったところはあります。私は高橋〔健人〕総長の時に総長室長をしましたが、その間にいままったような問題をだいぶ学びました。ですから、そういう知識は多少あつたし、私がクリスチャンでもあつたということもあるんでしょけれど、先生たちからの話を伺ったりする機会もありましたから、全く無知ではなかったんです。

大学の場合には、高校からの生徒を受け付けるのに当たって、最初から疑心暗鬼のような形で両者が入学問題についてかわわっていく。これは同じ学院に属しながらあまりにもひどい、何とかしなければいけないということとは前から考えていました。その意味では院長になって、私は自分の立場の上でその問題について発言し、場合によってはリーダーシップをとってこの問題を解決していくことが大事なことでないかと。私は望まずして院長を押しつけられたんですが、それが言ってみれば私というか、学院全体で考えていくことの一つの大きな契機になったと思います。

——独立採算制はやめて、学院に財政を集中させるといふところまではお考えにならなかった？

塚田 いや、考えていましたけれど、そこまではまだ……。

——手が回らなかった。

**塚田** そこまでは行かなかった。今はいちおうそのように、ある程度なっているんじゃないですか。

——いや、まだ独立採算です。

**塚田** その問題は何度も理事会などでも話はあるんですが、みんなそれぞれ我を張って自分のところの権益を守ろうというところがありますから。逆に言えば、特に中高とか小学校はあんまりかわらないでくれという側面もあるんです。ですから、大学が新座に行った時は、高校のほうはおもしろくなかったでしょうね。どんどん取られていくような、むしろ取られていくような感じを持ったでしょう。だから、私は校長や教員会にいろいろ話に行きました。

結果的に何とかなったんですが、その間には話のために何度も高校にも行つてそれなりの説得というか説明をしました。それを現実化していかなければ全体の体制が整わないという責任もあったし、カリキュラムの改革とか、生徒の大学までの受け入れ体制とかそういうものを、同じ学院の中に所属する学校としてスムーズに受け入れていくことは当然のことじゃないかと考えていました。

## 一般教育改革と新学部設置

——総長になられた時のことにお話を戻しますと、総長

に出馬される契機として語学教育の充実・改革の問題があったわけです。それに際しては、文学部長になられた辺りから、ほかの先生方とかいろいろな人とそういう取り組みを始めていたということです。そうすると、文学部長になられたのが一九九〇年ですから、九〇年代以降のことになりますが、九一年ぐらいから大学設置基準の大綱化が打ち出されて、立教に限らずほかの大学でも一般教育体制の見直しみたいなものが進み始めていました。そういうものとかかわりはあったんでしょうか。

**塚田** そういふものというの是一般の……。

——一般教育の再編の話と語学教育の充実の話は、ある時点でつながってくる話だと思いますが、最初からつながっていたのか。最初は別の問題として出てきたのか。どちらでしょうか。

**塚田** 一般教育部と文学部の関係は微妙で、一般教育の教員は、かなりの人は文学部の授業も持っていました。また文学部の先生も一般教育のほうを持っていた。しかし、各専攻によつてその関係が必ずしもうまくいっていない。仏文などは全く交流させて……。それでなかったらやっていけなかった時代もありますから、ここに所属しているかということは関係なしにカリキュラムをつくらざるを得なかった。しかし私は立教に来てキリ

スト教学科に属していました。キリスト教倫理の先生たちといろいろな面で密接に関係している分野でもあるわけですが、その間はいちばんいい関係でないというか、特定の先生とは親しくしていましたけれど、所属する先生たちみんなと交流するというふうな機会はあまりなかったんです。私は、これはちよつとおかしいんじゃないかと。

それと同時に、そのようになってるのは一般教育部と文学部という制度の問題ではないか。文学部のほうが何かより専門的だね。確かに、一般教育部のほうは一般教育ですから。でも、アメリカの大学などを見ても一般教育を教える人たちはベテランですよ。ベテランの先生のほうがいろいろな課題をやさしく、わかりやすく話をする力を持っている。新米の先生は自分の専門のことをやりたくてしようがないし、また知っている範囲もそういうところに限られている。

私もキリスト教倫理という名称で一般教育の科目を引き受けていましたが、自分の能力から見ても、どういう話をしていくのかということがいつも悩みでした。確かに、文学部のほうは分野がはっきりしているから教えやすかった。一般教育の科目は、一般の、それとは何も関係ない学生に話をするということですから、これは簡単ではないんです。たぶん、これはどの学問分野でも同じ

だと思います。年取ってきて経験してくると、そのような話をもう少し広く、学生の関心も踏まえて、できる。私自身もそういう経験をしました。一般教育部というのをつくって、教えるのにいちばん難しいレベル、教育としていちばん難しい役割をいちばん若い新米の先生たちにやらせていること自体に、私は最初から問題に感じていました。

——それはこちらに赴任された時ぐらいからということですね。

塚田 そうです。私は立教に來たいと思った人間ではなく、さんざん断つた末に説得されて來たわけだから、実際に一般教育をやってみて、一般教育を教える自分の能力の不足ということも感じました。やはり一般教育部という形での一般教育の教育は改革すべきじゃないかと。総長になった時に語学教育と全学カリキュラムをつくったのは、それです。全学カリキュラムという形にして、これを専門の先生たちが分担していく。一般教育に任せるという考え方を捨ててやってもらおう。実際にそうなたか。相変わらず若い人にやらせているところもあると思いますが、私の考えとしては、それはベテランの先生の仕事ではないかと思ってきました。ですから、私が目指したカリキュラム改革というのは、語学教育と全学カリキュラムを充実させることでした。

もう一つ、語学教育のほうでは単に語学全般をやっていただくではなく、能力別のクラスをつくって力のある学生を伸ばしてやる。私は持論として、一割の学生がよくできれば学校の評判が上がる、全体がいいように見える。だから、一割の学生でいいんだ。その一割の学生が優れた語学教育というか、あるいは能力を持つて卒業すれば、立教の卒業生は語学がよくできるという評判を得ることができると。一割を目標せよ。語学のほうでも全体をやるだけではなく、特別コースのようなものをつくってはどうか。

もう一つは会話です。話ができる。自分でもいろいろ苦労しましたから、会話の訓練。聞くこともなかなか難しい。聞くことと話すことをきちんと教育しなければいけない。そういうことでの語学教育の充実、そして全学カリキュラムを通しての一般教育の充実を図りたい。その結果というかプロセスの中で、一般教育を解体するということを考えたわけです。

——一般教育部を解体した後はとりあえず大学教育研究部という形になりましたが、ああいう形は当初から想定されていたのですか。

塚田 いやいや、あれは苦肉の策だね。一挙に各学部の中に押し込むことはできなかったんです。学部の場合は専攻が厳しく決まっています、そういう形のところにそう

いう人たちを入れることはなかなか容易でなかった。そういうことで、やりにくいところ、苦労した点はいくつあります。

例えばキリスト教学科で言えば、社会福祉学部という名前でしたか。

——コミュニティ福祉学部です。

塚田 コミュニティとか福祉というのはキリスト教と深く関係がある。もともとそういうものの興りは、キリスト教の精神の下でつくられてきたもの、生まれてきたものです。例えば峠のところでは峠で難儀をする人たちを助ける。そういうのを修道会がやってきた。あるいは十字軍の時にも必ず看護する人たちをそこにちゃんとつけてやっていった。社会福祉も単なるコミュニティ福祉ではなく、そういうところを踏まえながらやってもらおうと。多少キリスト教倫理の人をそっちに押し込もうという魂胆もあり、そういうことを理念の中に含める。社会福祉、コミュニティ福祉の中でそういう理念も考えてもらいたい。観光にしても、観光の中には、ますます他者に対するケアが含まれてきている。そういうことで社会福祉とも密接に関係があるのではないか。両者はそのように、二つの学部が向こうへ行つた時に協力し合いながら、共に新しい学部をつくり上げていく。そういうことをお願いし、またそういう人たちのような人事配置をさ

せていただいたということです。

——中高六年をつくった時の話で、中学と大学のキャンパス交換の話がありましたよね。あの辺は先生が総長で院長だからこそできたのかなと思って見ていました。

塚田 それは多少ありますね。

——その辺のメリットは感じになりましたか。

塚田 院長でなければ高校に行って話をするとか、そういうことはできません。難しいですよ。大学の総長が邪魔しに来たと思われる。だから小学校に行き、中学校に行き、高等学校に行きというのは、院長として行っているわけです。私は悪口を言われるのは慣れているから、後ろで何を言われようと自分が院長の時にこれをやらなければできないだろうと。この学校の使命とかいろいろなことを考えれば、やるべきことをやっていくのが私の役割だろうと思って努力したつもりです。

——私は一貫教育担当の事務局として、まさかそんなことが実現するとは思っていなかったものですから、あれはちょっとアクロバット的に見えました。中高六年もそうですし、大学と中学がキャンパスを交換して新築するなんていうことは、あの当時、中学の財政的にもありっこないと思っていましたので、総長・院長という立場は強いんだなと思いました。

塚田 そうですね。ただ総長だけだったら、できなかった

た。

——やはりそうですか。

塚田 余計なことをしていると何か言われたでしょう。院長としての立場は、普通は院長はお飾りみたいなものですが、私は院長職を大いに利用して。私の基本的な考えは教育改革でしたから、大学を変えていくプロセスの中で高校との関係の問題とかそういうのが出てきましたから、見直すべきものは見直して、変えるべきものは変えたほうがいいと思ったんです。

——院長・総長としてそれをなさっていた時、小宮山理事長と一緒でしたが、小宮山理事長はどんなサポートをしてくださいましたか。

塚田 全面的にサポートしていました。小宮山さんは私を全面的に信頼して支持してくださいました。それもありますよ。小宮山さんとの関係が悪かったらできなかったかもしれない。小宮山さんはいろいろな形で私を、直接的にという問題ではないですが、人間としても、また理事会の中でも私をサポートしていましたから、その点では、私は非常にやりやすかったですね。小宮山さんが理事長でなく、ほかの人で、それに賛同されていなければ、できなかったでしょうね。

——これは私の感想ですが、先ほど立教学院の院長でいろいろ調整するのは難しくなかったかという質問をしま

した。青山学院の院長に比べて立教学院の院長は、位置づけとしても、制度的に見ても、非常に軽い。そういう軽い立場でこれだけ大きな仕事をやったというのは、なかなか大変だったんではないかと思っただけです。でも、先ほどの山中さんの質問からすると、要は総長に院長を兼任した。これによって逆に……。感じとしては逆なんです。総長が院長を兼任したから力が強くなった。

——私はそう見ていた。

——僕なんか、その辺りの感覚がちよつと違っただけです。立教の特質を理解していなかったんだと思います。

**塚田** 私の感触としても、そうですね。総長としていろいろやったことは、理事会も、財政の立て直しとか、あの時、財政は非常に問題があっただけですけど、私は毎年毎年、全学にいろいろな報告やら、年度初めの課題などを提示していましたが、私が何をしたい、何をしていたかということは理事会の人たちもよく理解しておられた。ですから、ただ理事長だけではなく、理事会の人たちは全面的に私を支持していました。それで、中高のほうも、これまではどつちかというと大学の総長に対して疑心暗鬼でしたが、お互いに信頼関係を持つことができた。そういう意味で私は大変幸運だったと思います。そういうことがなければ……。今から考えればいろいろなことを強引にやってきましたから、憎まれてもしようが

ないようなことをやってきたと思います。

——細かいところについてまだいっぱい聞きすることがあるんですが、大まかなところでは一通りのことをお聞きすることができました。順を追って一通りお話を聞くことができたから、この辺りでひと区切りつけられるのではないかと思います。

**塚田** またもう少し聞きたいということがあれば。

——やっているとお手紙をやりとりするようなことが。

——それはまたお手紙をやりとりするようなことで。

(二〇一三年六月四日収録)